

アイヌ文化の形成過程をめぐる一試論 —威信財もしくはikor的存在を考える—

A Trial Theory on the Formation of the Aynu Culture:
On the Prestige Goods or the *ikor* such as Treasures

宇田川 洋

1. はじめに

かつて、アイヌと和人の関係に関して、アイヌの口承文芸の研究から中川裕による注意すべき発言があった（中川 1989）。物語性をもつ内容のアイヌの口承文芸（英雄叙事詩、神謡、散文説話、叙情歌、子守歌）から和人描写の類型を探ってみると、A交易相手としての関係、B会所の番人と労働者としての関係、C偶然の遭遇者としての関係、という3パターンになるという。そして、各ジャンルでの検討の結果、「シャクシャインの戦いなど、歴史上ではかつて頻繁に起こったはずの、アイヌ人と和人との（集団対集団としての）戦争が、はっきりそれを描いたと同定できる話としては見あたらない」（p.81）とされる。

「考古学から見たアイヌ文化複合体」（宇田川 1988）を構成する要素として重要なものの一つにチャシがある。その研究の一方法論として、チャシにまつわる伝説・口碑を集成して、その機能論を考えたことがあるが、言い伝えのほぼ半数近くは「集団対集団」の闘争用の砦としての機能を有することが指摘できた（宇田川編 1981）。ところで、児島恭子は英雄詩曲と散文とを同じ性格の資料として扱うことはできないと批判している（児島 1995）。そのことは正しい指摘であり、筆者もそのことを知った上で、伝説・口碑ではどのように扱われているかを検討したのである。

ともあれ児島の指摘の中で、とくに注目すべき部分がある。それはチャシの闘争伝承にかかわって、「宝物」（ikor）も闘争の誘因ないし目的となって、チャシと並んでアイヌの「戦争複合体」の構成要素であるとした渡辺仁の示唆（渡辺 1992）を重視している点である。筆者も、このチャシとikorに関する渡辺のいう「社会考古学的視点」を今後の研究課題として注意すべきことを指摘したことがある（宇田川 1994：325）。渡辺仁は「チャシの歴史を宝物の歴史に重ね合わせることができれば、両者の社会構造的関係を糸口にチャシの社会的意義を理解する一つの途が拓けるのではないかと思う」（p.8）と述べているのである。

このような方向性の分析に関して、その可能性を探る意味においても、考古学的に得られる物質文化資料としてのikorにはどのような「もの」があり、それがアイヌ社会の中で果たした役割と比重を考えてみる必要がある。ここでは、考古学的あるいは民族誌学的に見たアイヌ文化の形成プロセスの一端を、主にいわゆる「威信財」あるいはikorまたはikor的な意味合いの強い資料（「ikor的存在」と呼んでおく）をめぐる模索してみる次第である。

2. ikor（イコロ）をめぐる視点

アイヌ社会においてはikorと呼ばれる「宝物」がかなり重要な存在として位置づけられている。すなわち、それらは各種の神聖な儀礼を行う際の祭具としても、アイヌ社会の中で欠くことのできない物質文化要素となっているのである。そこでまず、中川裕による千歳方言としてのikorの説明をみると、「宝物。物語中ではとくに刀を指す。現実に残されているものでイコロと呼ばれているものは金属製の鞘だが、物語の中では鞘に彫刻をする常套的な表現があり、現在エムシemusと呼ばれているものも指しているようである。日常会話ではお金を指しても用いられる」（中川 1995：32）と説明されている。このようにikorは金属製の刀などを指し、アイヌ社会では本来製作できなかった貴重な品々に対して用いられている言葉である。このikorとその社会的機能について岩崎奈緒子が論及しているのも、まずその説明をみておこう（岩崎 1995）。

ikorの形態としては、『夷諺俗話』（1792）の「古器刀剣を以宝とし」とあるように刀剣が挙げられている。『東遊記』（1784）では「蝦夷人は家々に宝物とて所持す。多くは小束・縁頭・或いは行器、食籠などの如き蒔絵、金具などのうつくしき物を宝物とて、此を多く持ちたるを以て人にはほこると云」とあり、蒔絵物の漆器なども珍重されていたとしている。『東遊雑記』（1787）からは「日本のかたな・脇差も蝦夷人所持せることにて、甚だ秘蔵して、柄・鞘のかざりはマキリのごとくに製して、たから物のようにおもいおるよし」の記録で、刀剣は鞘あるいは柄などの各部分品も個別にikorの扱いとされたとしている。これらは本州から伝えられた製品である。以上の他、『蝦夷国風俗人情之沙汰』（1790）、『東遊雑記』（前出）などにみられるikorとして、希少品の衣類・tamasay（首飾り）やsitoki（首飾りの下部につく円盤状飾り板）などがあるとされている。これらはいわゆる山丹交易などを通じて伝えられたもので、「そのほとんどが蝦夷地では産出しない他地域からの移入品であり、美しい装飾品であった」（岩崎 1995：111）といわれている。また、鷲羽などは千島列島に良品があり、蝦夷地の特産として和人との交易に当てられたという。さらに文献史料として年代的に古いものは、1643年のM・G・フリースによる『アイヌ社会探訪記』とされ、少なくとも17世紀から19世紀半ばまで「移入された装飾品の尊重」としてikorが存在したことを指摘している。

そしてikorの社会的機能として、『蝦夷志』（1812）、『寛政蝦夷乱取調日記』（1789）などの記録からは刀剣類のikorの授受を媒介とする「契約」（^{てじろし}手印）があるとされる。これには生産活動を行

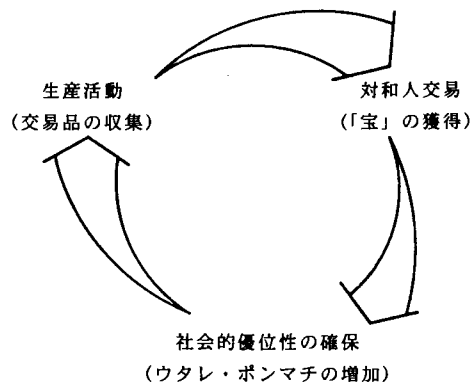


図1 生産活動・交易・ikorの集積の連関図（岩崎 1995 より）

う漁場領域の境界の担保としてのikorも含まれる。また、婚姻に際しての男性から女性の側に贈られる婚資としてのikor授受も一種の「契約」とであるとされている。また、ikorがもつ社会的機能の2点目として「紛争解決と贖罪」が挙げられている。著明な『北海随筆』(1739)には「蝦夷の法を犯し、不儀ある時は、罪の償として宝物を出さしめて相手へ謝す」と記録されているのである。

岩崎はこのようにikorの意義づけを行っているが、そのアイヌ社会での特質として図1に示すような図式を提示している。千島列島などの「生産活動」の代表として前出の鷺羽やラッコ皮があるが、それらは「千島交易」といわれ、それらを「対和人交易」という形でikorを手に入れ、「社会的優位性の確保」につなげるというものである。その中の「ウタレ」とは「下人・召使・家来」と訳される特定の主人に従属する隷属民、「ボンマチ」とは複数の妻とされる。それらを労働力として増加させることによって社会的優位性が確保され、生産活動・交易活動が拡大するという。

以上がikorをめぐる岩崎理論である。その問題の所在として、1789年の寛政国後の戦いの時の「アイヌ社会の慣習の破壊」という菊池勇夫論(菊池 1994)があり、そこにikorが果たした役割を説いているのである。菊池は、1669年のシャクシャインの戦いで代表される松前藩に対するアイヌの蜂起後のツクナイ(償い)として刀剣類が主であったとしている。それらは武器であるよりikorとしての性格が強いとし、漆器とともにikorの代表品であるとしている。そしてikorを多く所有している者ほど社会的威信をもっていると考えている。さらに別に「アイヌの人たちが漆器や刀剣といった宝物を威信財としてたくさん所有できたのは、蝦夷地産物が日本の市場経済のなかで重要な位置を占めることと不可分に結びついていた。松前藩による支配の枠組みのなかであれ、18世紀のアイヌ社会の高揚を認めざるをえない」(菊池 1999: 13)ともいっている。ikorが「威信財」としてアイヌ社会を高揚させたという指摘である。しかもその年代を18世紀に置いているが、その年代は筆者がいうところの14~18世紀頃の「原アイヌ文化」(宇田川 1988)の後半期に相当し、チャシが主に対和人との闘争用に使用されたピークに当る時代である。また、アイヌ社会のもっとも重要な仔グマ飼育型クマ送りのiomante儀礼の確立は18世紀後半と押さえている(宇田川 1989)が、ikorの果たした役割がここにも反映されているといえよう。

3. 交易システムとikor

最近、山浦清によって北海道の続縄文文化期から擦文文化成立期にかけての本州との交流に関する論文が提出されている(山浦 2000)。その中でC.Renfrewによる「交換形態としての交換モード」を紹介している。図2に示したものであり、山浦による説明を引用しておこう。

モード1(直接接近) : BはAの地に直接、目的物の獲得に出かける。Aとの接触はなく、これは交易以前の状況である。

モード2(互酬・居住地型) : BはAの居住地に出かけ、そこでAと交換する。勿論、Aが出かける場合もある。

モード3(互酬・境界型) : AとBは境界線で出会い、そこで交換する。A-B間に「出会い」があるが、いわゆる沈黙交易などもこうしたモードとして理解される。

モード4(互酬連鎖交換) : モード2, 3が連鎖系をなし、中間地域での交換を通して、AとBは交易を行う。

モード5（中心地再分配）：A, Bは、中心地に出かけ、そこの管理者を仲立ちとして交易する。

モード6（中心市場交換）：中心地にA, Bは出かけ、そこで直接交換をする。その交換に、中心地の管理者は関与しない。もちろんモード5と排除しあうものではない。

モード7（仲介者交易）：仲介者Mが存在し、彼らがA, Bにそれぞれ出かけて、交易を行う。

モード8（使者交易）：Bの監督者は、Eを使者としてAに送り、交易を行う。「徴税人」を派遣しての交易、例えばロシア帝国によるコサックを派遣しての、シベリア原住民からのヤサーク（毛皮税）取り立てなどがこれにあたる。朝貢とされるものは、これの裏返された形態である。

モード9（租界交易）：Bの監督者はAの領域内に租

界を設け、そこで使者EはAと交易を行う。城柵などを舞台としての交易が想定されるが、Aからみれば朝貢にあたろう。

モード10（交易港交易）：A, Bそれぞれの監督者は、使者Eを交易港に送り、そこで交易させる。交易港はA, B両者から独立した中立地である。

以上であるが、結論だけを取り上げると、続縄文文化期にはモード4の交易システム、擦文文化成立期にはモード8あるいは9のシステムがあったことを想定している。

ところで、この中のモード3に見られるいわゆる「沈黙交易」であるが、古く鳥居龍蔵が指摘している（鳥居 1919）。「原初的なアイヌ」（「古くからいた蝦夷アイヌ」⁽¹⁾）とされるいわゆるコロポックル korpokunkur が行っていた「無言取引」 Mute-Trade で、夜間に交換者が互いに言葉を交わさず、顔もみせないで品物を交換する取引があったという伝説を紹介しているのである。そして、この奇異な風習は決してコロポックル・アイヌだけに限ったことではないとし、W.Bogoras⁽²⁾ が紹介したチュクチ族、新井白石の『蝦夷志』にみえる択捉島の「蝦夷アイヌ」においても普通に行われていたと述べている（p.401）。

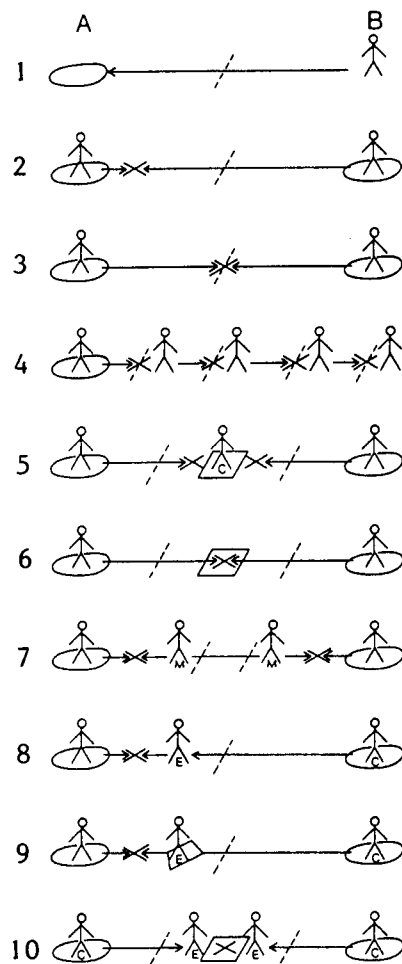


図2 Renfrewの交換の諸モード(山浦2000より)

さらに『日本書紀』を引用して斉明天皇6年(660)の阿倍臣と肅慎の出会いの「無言取引」を説明している(p.403)。これに関しては工藤雅樹も分かりやすく説明しているので、それを引用しておこう。「斉明六年三月、比羅夫は二〇〇艘の船をひきいて三度目の遠征に出た。この時に比羅夫は陸奥の蝦夷を自分の船に乗せて、ある大河の河口に到った。ここには渡嶋の蝦夷千人ほどが集まって、大河の畔に営していたが、突然に肅慎の船が襲ってきたので助けてほしいと比羅夫に申し出たという。比羅夫は肅慎とも接触しようとして布、武器、鉄などを海辺に置き様子を伺った。やがて二人の老人があらわれて海辺の品物を確かめ、そのなかから布を取り出し自分たちの船にもどっていった。しばらくして老人が再び現われ、先程の布をもとに戻して船に帰っていった。これはいわゆる無言貿易による交易を比羅夫側が相手側に求めたが、相手側が交易の品物を検討のうえ、結局は申し入れを断ったということである」(工藤1998:91-92)。

このモード3の交易システムがすでにAD660年に存在していたことを知ることができる史料である。7世紀半ばという年代は統縄文時代末期ないし擦文時代早期に相当し、後に述べる考古資料の交易とも関係してくるのである。工藤雅樹はさらに、和人とアイヌの交易に関してウィマム uymam とオムシャ umusha という形式が重要な機能を果たしたことを指摘している。15世紀中半以降の「松前藩の時代になるとウィマムは、交易品を松前の城下にもたらしたアイヌが藩主にしかるべき礼儀をもって対面し、その後で貢納品に対する下賜品という形で事実上の交易が行われるものであった。…古い時代の交易のありかたをうけついでいることは明らかである。これに対してオムシャというのは、和人が交易の品を積んでそれぞれの請負場所に行った際に行なわれた儀礼であって、本来は、和人数側の贈りものに対してアイヌが返礼をするという形の交易であった」と説明されている(工藤1998:358)。このウィマムとオムシャは、モード2の交易システムと考えてよいものである。比較的古いスタイルの交易システムということができよう。なお、ウィマムとオムシャに関しては高倉新一郎の研究(高倉1966, 1972)が詳しいので参照されたい。

4. ikor的存在としての考古資料

では次に考古資料の中から「ikor的存在」と考えられるものを概観しておこう。ここでは擦文時代以降を考えてみる。

a 擦文文化の資料(図3)

近年、発掘資料が増加しはじめている青銅鏡がまず注目される。図3-1~3は平取町カンカン2遺跡出土の10世紀中頃のものであるが、特に3は成分分析の結果、朝鮮半島で製作された佐波里鏡とされているものである(森岡1996)。4は恵庭市カリンバ2遺跡出土品で、これも佐波里鏡とされている。SH-1号擦文竪穴に伴うもので、10世紀中頃かそれ以降の年代が与えられている(上屋他1998)。5・6は平取町亜別遺跡出土の青銅鏡である。擦文後期の一括土器とともに出土している(森岡・長田2000)。他に図示しなかったが、釧路市材木町5遺跡からも2号竪穴埋土中から銅鏡片が出土している(西他1999)。同遺跡からは別のikor的存在としての青銅鏡(図3-7)が出土している。15号竪穴に伴ったもので、中国浙江省湖州地方で製作された「湖州鏡」である。その竪穴は¹⁴C年代で850±90BPと出されているので12世紀に当ててよいであろう。

別の擦文時代の特異な遺物として、漆椀が挙げられる。図3-8は札幌市K36遺跡タカノ地点の

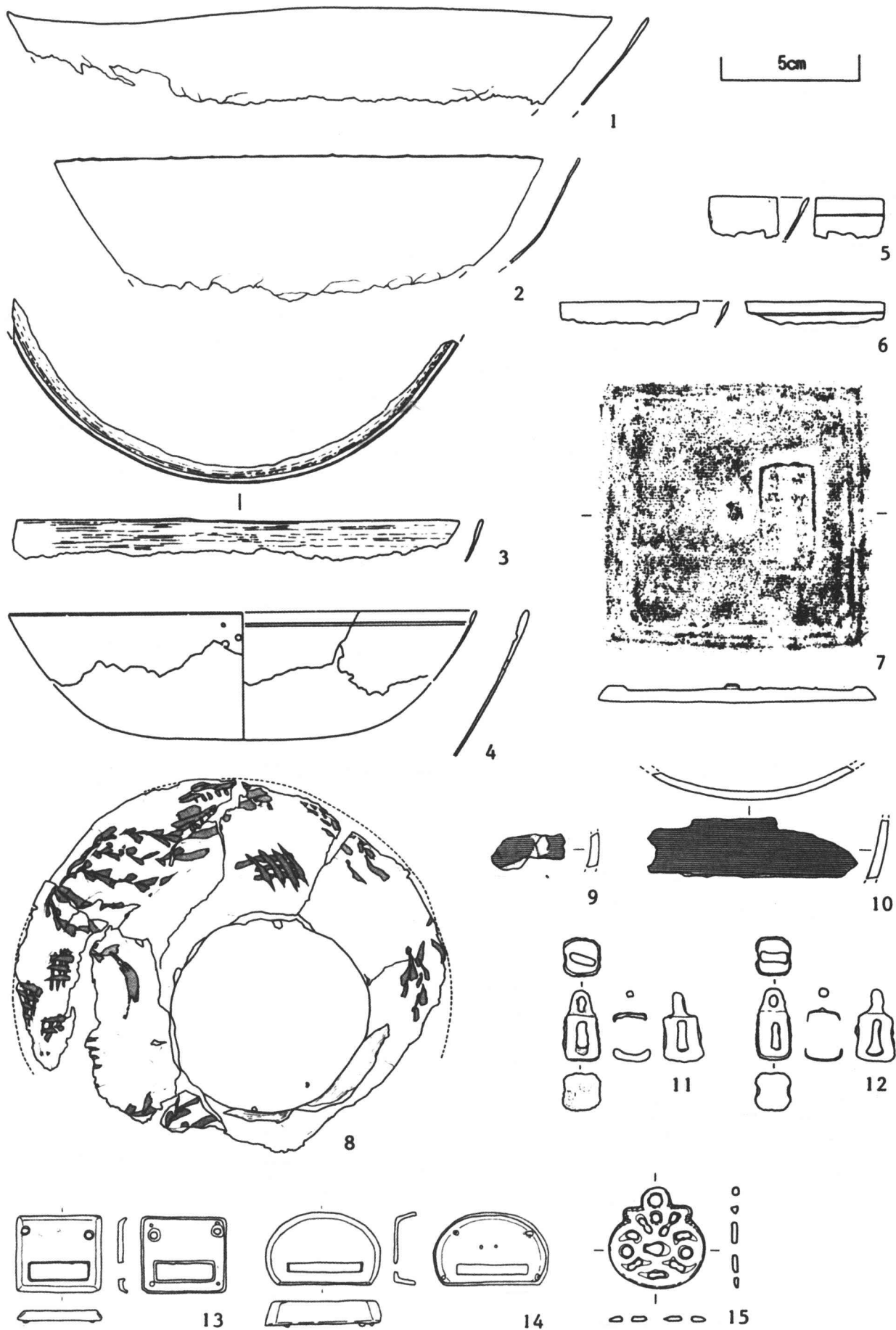


図3 擦文文化のikor的資料

1号竪穴に伴ったもので、伴出土器は10世紀頃の擦文土器である。ただしベンガラ漆の文様表現は13世紀あるいはそれ以降のものである可能性が高いとされている（秋山1997）。これに伴った錫製環状装飾品もあるいはこのikor的存在の資料として扱ってよいものかも知れない。釧路市STV遺跡8号竪穴床面出土の漆碗片（図3-9・10）も貴重な資料である（宇田川1983）。

また、余市町大川遺跡は擦文時代その他の豊富な遺物を出土した遺跡として注目されているところである。そのような中で図3-11・12は擦文時代前半期のGP-50号墓に伴った青銅製垂飾で、鐸に属するものであろう（乾・熊崎2000）。オホーツク文化に伴う青銅製鐸とはやや形態が異なり、中国内蒙古自治区包頭^{ばおとう}出土のものに類することが指摘されている。同図13・14は遺構外出土の青銅製鍔帯金具であるが、13は巡方、14は丸柄である。ともに8世紀代の律令社会と関係する遺物といわれ、本州製品の可能性が高い資料である（乾・小川2000）。さらに図3-15は、千歳市美々8遺跡出土の銅製垂飾品（田口・鈴木1996）であるが、これも9世紀後半から10世紀前半の降灰のB-Tm（白頭山-苫小牧）火山灰の下層で発見されていることから、擦文時代に属する可能性が高いものである。しかも沿海地方からの搬入品と考えられるものである（小嶋2000）。また小嶋によると、他に大川遺跡や美々8遺跡出土の黒色壺や枝幸町ウバトマナイ沢出土（伝）の黒色土器なども、「女真系遺物」の可能性が高いとされている。擦文社会の中にオホーツク文化経由の大陸遺物がもたらされている可能性があるのである。なお1999年の調査では、千歳市ウサクマイN遺跡で粘土紐貼付文のオホーツク土器が発見されたり、皇朝十二銭の富寿神宝（818～834年铸造）が検出されている。このような北からと南からの遺物の伝来は当然交易を伴うものであるが、ikor的存在としての遺物の扱いがなされていたことを思わせるものである。言い換えれば「威信財」としての存在である。

以上のように、擦文文化に属するであろう遺物の中にikor的存在として扱ってよい特殊な遺物が認められるのである。しかも本州製品の他に、シベリア大陸あるいは朝鮮半島や中国の製品が持ち込まれていることが理解できる。それらの意義づけがアイヌ社会へのつながり・アイヌ文化の本質へ迫るアプローチになるであろうと考えるところである。

ところで、山本哲也は「擦文文化の祭祀」という形で論文を発表している（山本2001）。前出のカンカン2遺跡の周溝盛土遺構のような祭祀の場などを想定しているが、遺物に関しても言及している。祭祀性のある遺物として、ミニチュア土器・土鈴・鏡形土製品・有孔円板・線刻文字のある土器・絵画土器、土製・石製・金属製・ガラス製の玉類、銅製品・銀製品・鉛製品・鉄製品、石製品、骨角製品、貝製品、木製品などを挙げている。その遺物のもつ役割を考える一つの方法論であるが、今回のような威信財＝ikor的存在としての資料の意義づけもまた必要なことであろう。

b オホーツク文化の資料（図4）

オホーツク文化には数多くの鉄製品や青銅製品などの大陸系遺物が伴うことが知られている。菊池俊彦（1976）や山田悟郎他（1995）の研究があるが、近年、高畠孝宗はそれらを三種に分類している（高畠1998a）。Ⅰ装身具（青銅製帯飾・青銅製鐸・青銅製鈴・鉄製鈴・金属製耳飾・軟玉製環状石・ガラス玉）、Ⅱ武具（曲手刀・鉄製鉞）、Ⅲ生活用具（曲手刀子・平柄鉄斧）である。そのような中で比較的出土点数が少なく、かつ貴重品とみなされるikor的存在としてよい遺物を概観し

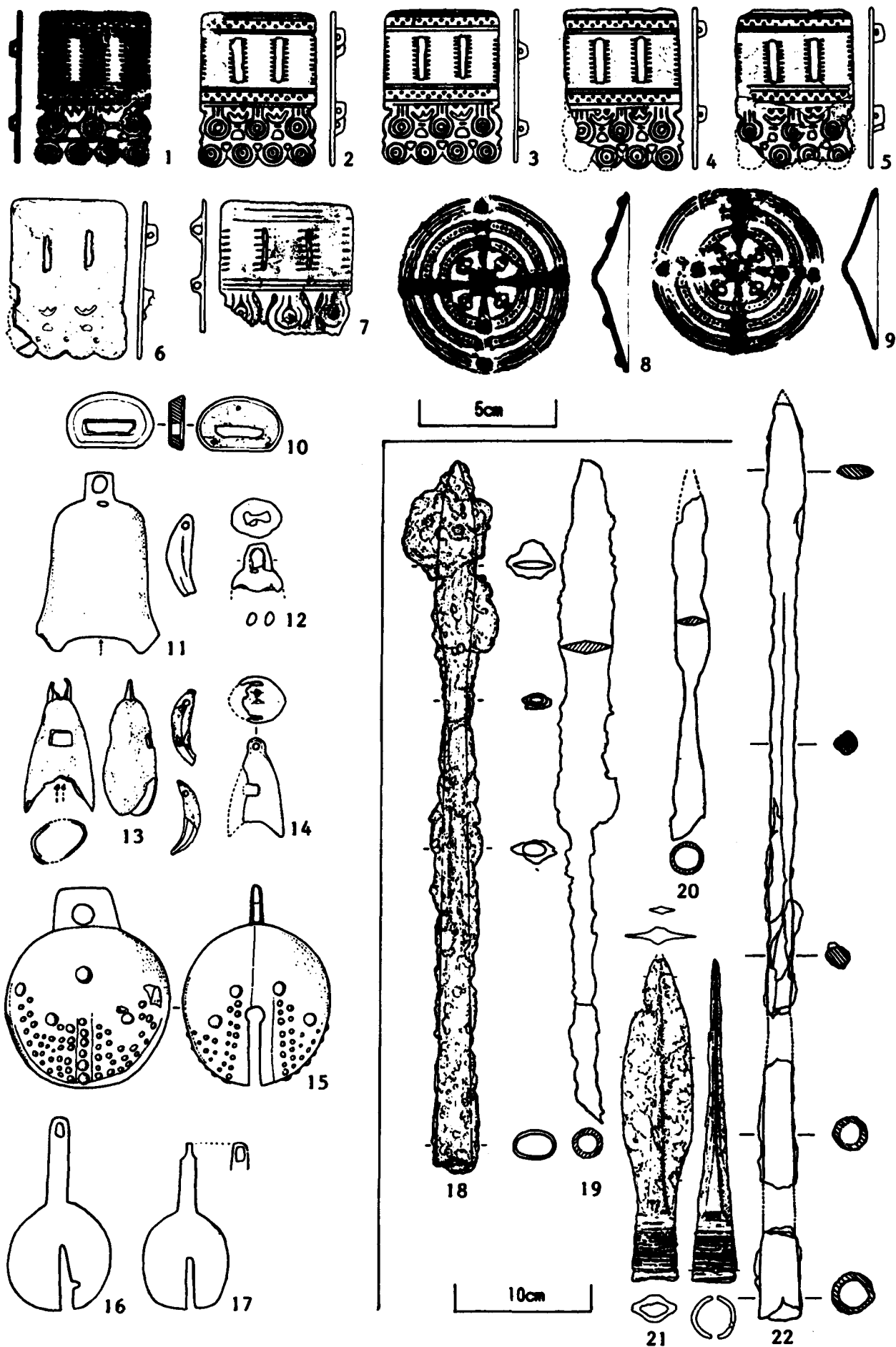


図4 オホーツク文化のikor的資料

てみる。

図4-1～9は青銅製などの帯飾である。1・8・9は網走市モヨロ貝塚出土品（大場1962）。7は銅製で常呂町栄浦第二遺跡出土品（東京大学文学部考古学研究室編1972）。2～6は枝幸町目梨泊遺跡出土（佐藤1994）であるが、2～5に関しては1のモヨロ貝塚の資料と同じ鑄型から作成された可能性が大きいと指摘されているほど酷似するものである。この点に関して高畠は「大陸系装飾具・武具に見られる目梨泊遺跡とモヨロ貝塚周辺地域への極端な偏重」があるとし、これらの「言わば『威信財』に相当する遺物が、供給する側の集団（大陸の靺鞨・女真文化集団）の主体性のもとにきわめて『選択的』に供給された結果ではないか」（高畠1998a：15）と述べている。また別に目梨泊遺跡を「モノの『再分配拠点』」として位置づけしている（高畠1998b）が、目梨泊遺跡とモヨロ貝塚がオホーツク文化の北方交易の拠点港的役割を有していたことを物語っているのであろう。

10は丸鞆の鍔帯金具で、目梨泊遺跡の出土品である。11～14は鐸であるが、11はモヨロ貝塚（宇田川編1984）、12は常呂町常呂川河口遺跡（武田1996）、13は根室市弁天島遺跡（北構・山浦1982）、14は目梨泊遺跡出土である。12は銅製で、他は青銅製品。15～17は鈴であるがモヨロ貝塚から出土している。15は青銅製（宇田川編1984）、16・17は錫製である（河野1958）。図示しなかったが稚内市オンコロマナイ遺跡でも鉄製の鈴が1点出土しているが、オホーツク文化に属するかどうかは不明である。また、オホーツク文化に伴う土製の鐸が礼文町香深井6遺跡で出土している（前田他2001）が、青銅製鐸の模倣であることは明らかで、威信財入手への願望の表れであろう。

18～22に示したものは鉄製の鉾である。18は目梨泊遺跡、19・20はモヨロ貝塚（大場1962）、21は中標津町西竹2遺跡出土のもので長さ24.5 cmで、袋柄に銀と思われる象嵌を16条横に施しているものである（大沼1965、山宮1992）。22は常呂町トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土のもので、推定全長68.5 cmの鉾である（藤本・宇田川1989）。

次に、オホーツク文化に伴うと考えられる蕨手刀についてみておくことにしよう（図5）。但し1は両刃の鉄剣である。1～7は目梨泊遺跡出土品。1は9号墓出土、2は遺構外、3は7号墓、4は30号墓、5・6は34号墓、7は範囲確認調査1号墓出土。そして8～13・15は石井昌国紹介の資料である（石井1966）。8は枝幸町落切、9～12はモヨロ貝塚、13は網走市網走湖畔、14は常呂町トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点（右代1990）、15は羅臼町船見町出土のものである。これらの他にも擦文文化に伴う蕨手刀は多数知られているが、それについては葛西智義他（1993）を参照されたい。国後島の1点を含めて北海道では42点が集成されている。

周知の通り、蕨手刀は本州製品であり、北海道で出土している多くは擦文文化の遺跡に属するものである。図示したオホーツク文化に伴うとみなされる蕨手刀は、擦文人を介して入手していたものと考えられるが、Renfrewの交換モードでいうとモード2ないし3に相当するが、より積極的にモード7の仲介者の存在も想定できるかも知れない。高畠孝宗は、蕨手刀や袋柄鉄斧などの「オホーツク文化に見られる本州産品は直接本州から流入したのではなく、石狩低地帯の人々をクッションとして間接的に流入した」のではないかとしている（高畠1998b：90）。またオホーツク文化に属する蕨手刀の発見数をみると、枝幸町で6本、網走市で5本が出土しており、青銅製帯飾とともにこれは他の遺跡とは比較にならないほどの出現率である。両者の代表遺跡はいうまでもなく目梨泊

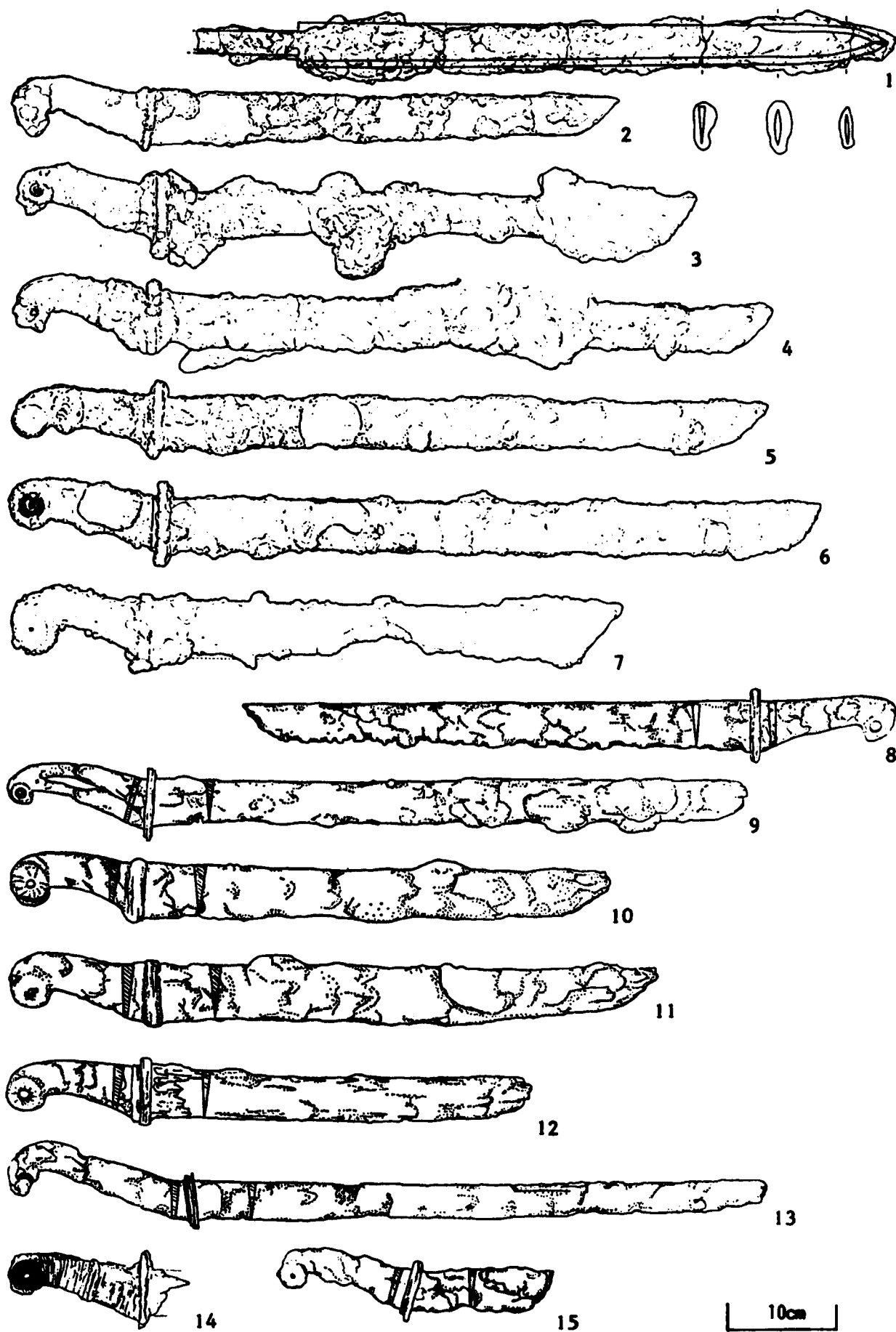


図5 オホーツク文化の藤手刀

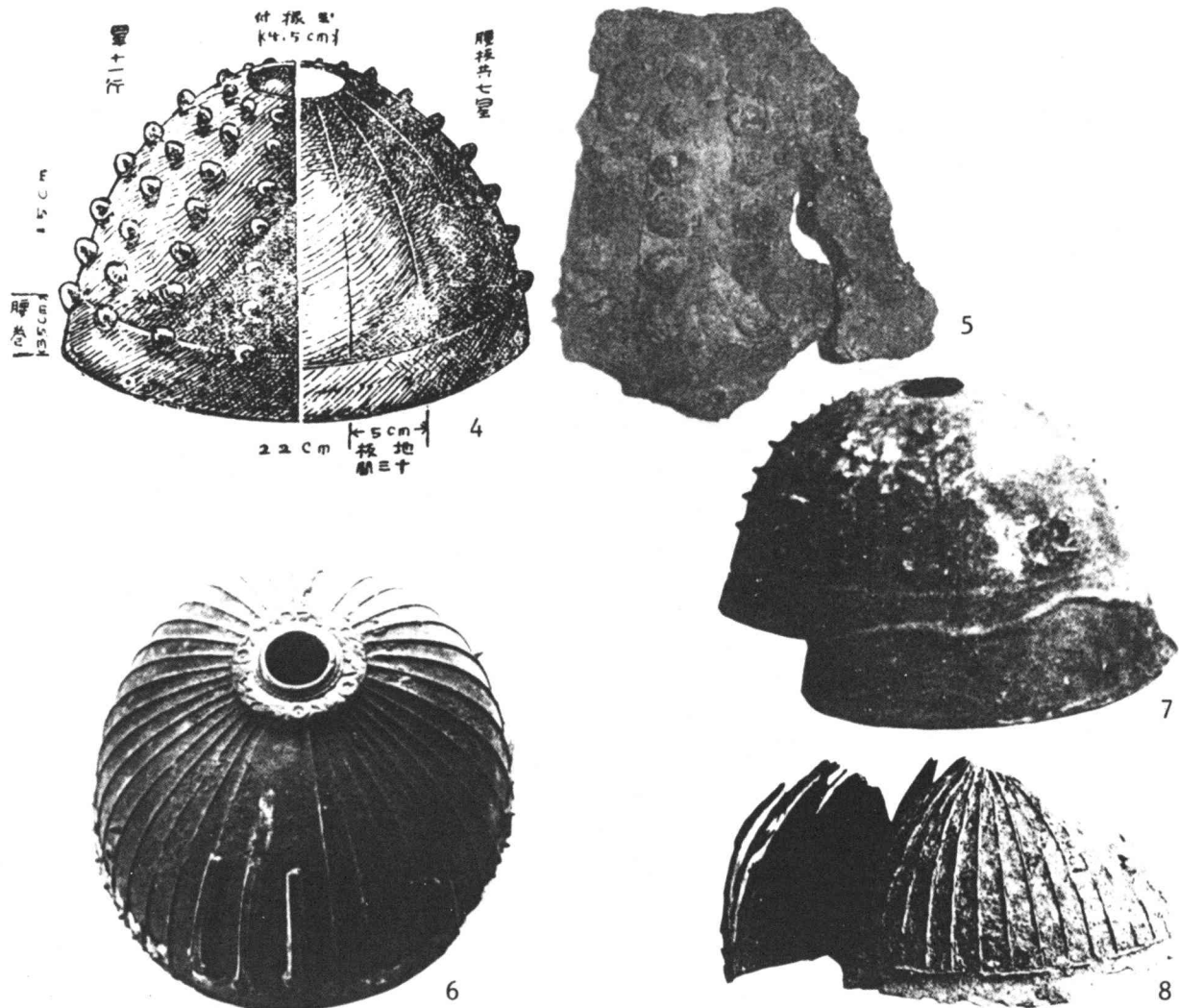


図7 中世・近世の兜（縮尺不同）

表1 兜出土地一覧表

遺跡名	形式（他の出土品）	時期	文献	備考
瀬棚町瀬田内チャシ跡	筋兜		千代 67, 福士 85	
瀬棚町兜野			瀬田内町史年譜	
余市町大浜中			松下 73	
札幌市北 1 西 2 付近	甲の鉢		宇田川校註 83, 阿部 19	明治 20 年 7.14 発掘
札幌市北 1 条養蚕所付近	銀前立ある甲状		宇田川校註 83, 阿部 19	明治 20 年 7.13 発掘
札幌市南 1 条	13 間星兜		宇田川校註 83, 福士 85	本論図 7-4, 北大博物館蔵
札幌市北 1 西 8	（上記と同一か）		後藤 37, 阿部 19	明治 22 年 7.14, 21 発掘
浦臼町			野村編 69	
月形町札比内			浦臼町史 67	
深川市納内	28 枚張星兜（小札, 金具廻, 刀他）	鎌倉—南北朝	葛西他 92	本論図 6-2
富良野市扇山東 9 線			富良野町史 68	
占冠村双珠別 1 線			占冠村史 63	
増毛町暑寒別山麓			宇田川校註 83, 福士 85	宝暦 7, 8 年発掘, 伊達翁記蔵
増毛町カムイエトチャシ跡			増毛町史 74, 福士 85	
留萌市エンドマッカ	12 間星兜（杏葉, 支那製兜）	平安	留萌町史 45, 福士 85	本論図 6-1, 明治 31 年頃発掘, 町教育委員会蔵
留萌付近			宇田川校註 83	久慈貞次郎, 明治 26 年頃発掘
厚真町	筋兜（鍛先）	南北—戦国	宇田川校編 84, 宇田川校註 84, 福士 85	本論図 7-8, 明治 42 年発掘
平取町ボロモイチャシ跡	星兜? 残欠	Ta-b 以前	道理文センター 86	本論図 6-3
静内町駒場貝塚付近	14 間星兜	室町—江戸初	宇田川編 84, 河野 63, 福士 85	本論図 7-7, 青銅製
陸別町トラリ I チャシ跡付近	34 間星兜（盾庇, 鎧, 鍋, 刀, 槍）	南北朝後期	陸別町史 94, 宇田川編 84, 福士 85	本論図 7-6, 足寄町證寺蔵
釧路市緑ヶ岡	14-16 枚張星兜	平安後期	山岸 74, 福士 85	本論図 7-5
釧路市頓化鉄道病院用地	星兜残欠（胴丸, 小札, 刀）		東京国博編 92, 道人類学会編 19	大正 6 年 4.8 発見

遺跡とモヨロ貝塚であり、それらの遺跡の果たした役割を改めて考え直さなければならないことを意味していよう。このことに関してはまた後に触れることにする。

c いわゆる中世・近世の資料（図6）

まず、兜に関する資料をみておく。図6-1は留萌市エンドマッカ（塩見町）出土のもので、福士廣志による紹介がある（福士1985）。推定12枚張の矧板鋳留式の星兜で、一部に黒漆が残っているという。杏葉の残欠や据文金物などの残欠もある。兜の年代は平安時代後期から末期、杏葉は鎌倉時代とされている。また別にエンドマッカからは支那製兜と青竜刀の出土例があることが記録されている（宇田川校註1983）。2は深川市納内出土の資料である（葛西他1992）。小札・金具廻破片・刀・耳飾り・ガラス玉なども得られている。兜は28枚張の矧板鋳留式の星兜で、鎌倉時代から南北朝時代にかけての特徴があるとされている。3は平取町ポロモイチャシ跡遺跡出土の星兜の残欠であろう（北海道埋蔵文化財センター編1986）。小札も出土している。

図7-4は札幌市南1条出土の13枚張矧板鋳留式星兜である（金田一・杉山1943、宇田川編1984）。後に述べる鍬形や刀も出土している。5は釧路市緑ヶ岡出土のものである（山岸1974）。14もしくは16枚張の矧板鋳留式の星兜である。製作年代は平安時代後期の11世紀後半から12世紀前半と推定されており、あるいは擦文文化に伴った可能性があるものである。他に釧路市頓化鉄道病院用地出土といわれる星兜残欠が胴丸や小札の残欠・刀とともに出土している（東京国立博物館編1992）。6は陸別町トラリIチャシ付近から出土した34枚張の筋兜である（後藤1994）。他に盾庇・鎧・鍋・刀・槍先なども出土している。兜の年代は南北朝時代後期とされている。7は静内町駒場貝塚付近出土の14枚張矧板鋳留式の星兜である（宇田川編1984）。直径23cm。青銅製で、室町時代から江戸時代初期にかけての大陸製といわれている。8は厚真町出土の筋兜である（宇田川編1984）。南北朝～戦国時代のものとされている。鍬先も出土したいが、散失したという。

以上の他にもいくつかの兜が知られている。その出土遺跡一覧表が発表されている（葛西他1992）が、それをもとに新たに一覧表を作成しておいたので参照願いたい（表1）。

では次に鍬先に関して考えてみよう（図8）。1～7は栗山町角田村桜山出土の資料である⁽³⁾（東京国立博物館編1992、高橋1929、阿部1919、杉山1926）。いずれも鉄地銀装鋳留とされる。1は長さ45.5cm、2は長さ47.5cm、3は長さ48.5cm、5は長さ46.3cmである。8・9は積丹町小泊観音寺境内出土品である（犀川会編1933、杉山1933、金田一・杉山1943）。8は鉄地に銀無地の円形金具が施され、9は全長1尺4寸とされ、鉄地に黒漆をかけ、円形の銀金具を施している。10は札幌市南1条出土のものである（犀川会編1933）。河野広道（1933）によると8～10の資料の説明として、「徳川時代の蝦夷関係の記録にしばしば記録してあるものに鍬先がある。これは薄い金属の板を以て造り、形は兜の鍬先に似て大きい。昔時アイヌはこれを宝物として大切に、病気の時など枕頭に置いて平癒を祈るに用ひたといふ」（p.34）とある。11は静内町シベチャリ山中で発見されたとされるものである（高橋1929、杉山1926）。高橋勇の説明では、長さ1尺4寸5分で、一般のものと異なる構造で、先のほうだけ鍬形のように取り外しができるという。松浦武四郎から男孫太に伝わったものであるとされる。図9右上の1は、近年発掘資料として得られたものである（川内編1990）。平取町額平川2遺跡6号土坑のアイヌ墓に伴った資料で、刀、刀装具、刀子、青銅製金具など

にも出土している。鍬先の先端部のみであるが、1孔が穿たれている。極めて重要な資料といえよう。

ところでこの鍬先に関して、杉山寿栄男（1926）は次のように説明している。「往昔より蝦夷のクワサキとて、内地人間にも問題とせられ、人のよく知るところである。事ある時にはこれを取り出して祈禱をすれば悪神を祓い怨敵をも退けると信ぜられたものであるが、またその返しも畏しいものであるとされている。しかもまたこれと同座することも畏れられて、山地の穴の中などに蔵し、人をしてその所在を知らしめぬ。これをキムシプ（Kimushpu）というが、またこれに祈って災を免るることあれば「送る」（Iwakte）といって土中にこれを埋める風習もある。…アイヌ古老中には今なおこれを記憶するものもあって、これをキラウウシトミカムイ（Kirau-ush Tomi-kamui）則ち角の生えている宝神—又はペラウシトミカムイ（Pera-ush Tomi-kamui）—簗のついている宝神—と呼んだのである。中には木製のものもあったともいわれる…」（第67図版解説）と。金田一・杉山（1943）も同じような内容のことを記している。すなわち「この鍬先類は彼等の信仰神としてキムシプ（Kimushpu）とてこれに祈って御利益のあった節これを屋内に飾り置くとその祟りが恐ろしいとの事で、この物の所在を人に知らしめない為に彼等の習慣としてイワクテ（iwakte）とて土中に埋蔵」（p.18）するとされている。

また別に、古記録でも扱われていることは八木槌三郎の研究（1902）を初めとして、阿部（1919）や高橋（1929）などでも紹介されているところである。詳細はそれらに譲ることにして、ここでは松浦武四郎の『蝦夷漫画』をみておこう（図9 左上・左下）。左下の説明は「ペラウシトミカモイの図 男蝦夷第一の宝物也。宝暦年中カヤベこの村のユノサキニ而数枚を掘得たり」とある。ここに出てくるユノサキは出土地一覧表の森町湯の崎の丘を指しているのであろう。また左上の説明は「ペラウシトミカモイとハ鍬形の事也。是昔し兜に附しものか。何かは知らざれども蝦夷第一の宝物として、^{ユウカリ}呼道曲中にも^{カルモシリカモイ}造島神天より降り玉ひし事の中に其家にも伝ふと有。深く是を尊敬して山林また幽谷に一字を立て安置し、神酒を作りし時ハ必是に献ず」とみえる。この図ではアイヌの古老がうやうやしく鍬先を山中に安置する様子を描いているが、『夷酋列像』では、山丹錦を着用した古老が鍬先を大事に手に持っている様子が描かれており、威信財あるいはikor的存在としての扱いであったことを知ることができる。蠣崎波響の「紋別アイヌ東武画像」でも鍬先をもつ勇姿がみえる。

ところで松浦武四郎の『蝦夷漫画』の説明をみておいたが、八木槌三郎（1902）によると別の古記録にもしばしば鍬先のことをみえるという。

1 新井白石	蝦夷志・同附図	享保5年（1720）
2 新井白石	蝦夷事略	
3 新井白石	本朝軍器考	宝永6年（1709）
4 日下部景徳	愚得随筆	享保12年（1727）
5 伊勢貞丈	蝦夷鍬先考	明和6年（1769）
6 伊勢貞丈	蝦夷鍬先考	天明年間（1781～1788）
7（松前家所蔵）	蝦夷風土記	

が挙げられているが、阿部正巳（1919）は、これらの1・3・4・6以外に次の文献を挙げている。

8 松前藩	幕府上呈書	正徳5年（1715）
9 板倉源次郎	北海随筆	元文4年（1739）

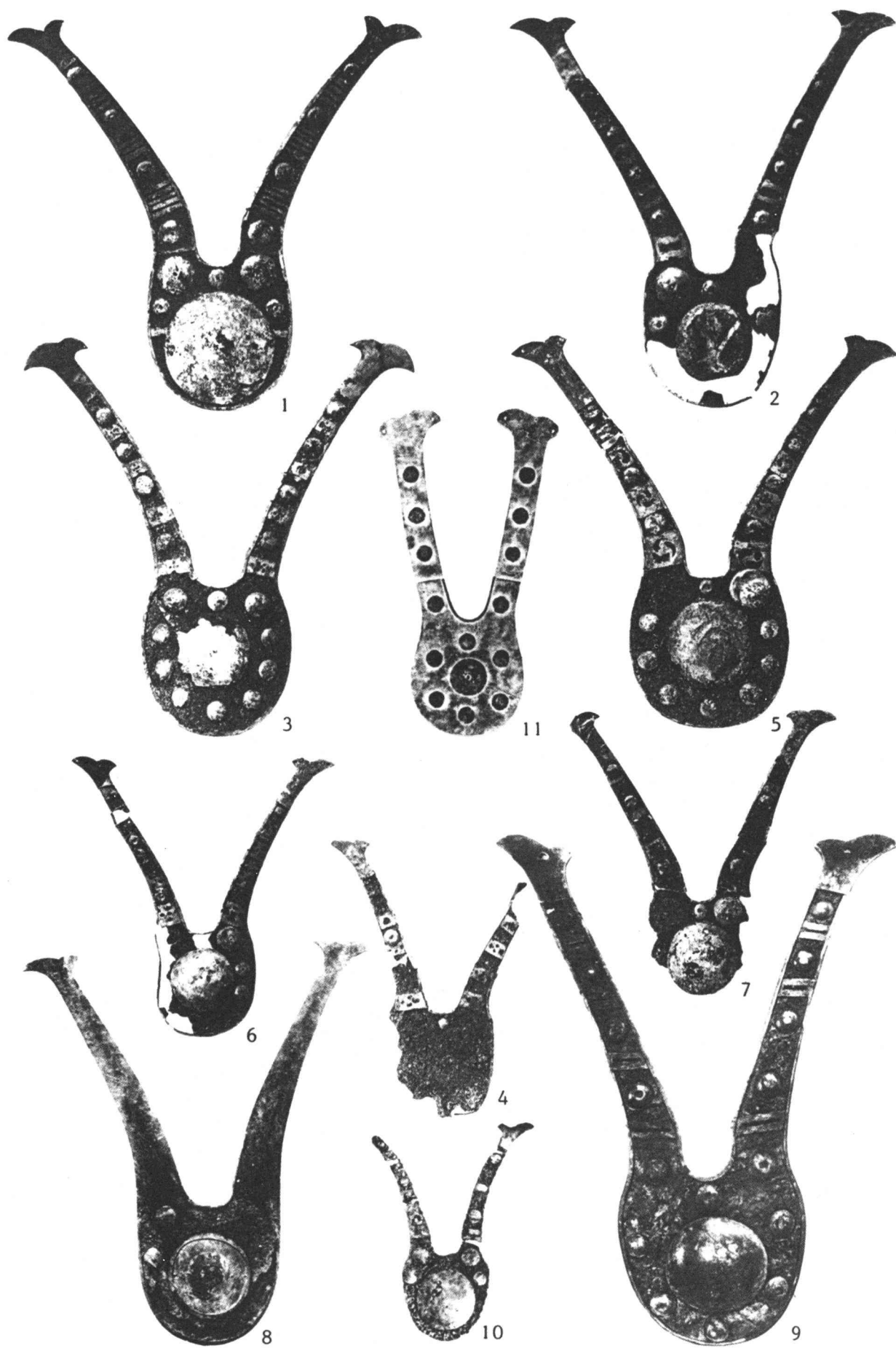


図8 中世・近世の鋤先（縮尺不同）

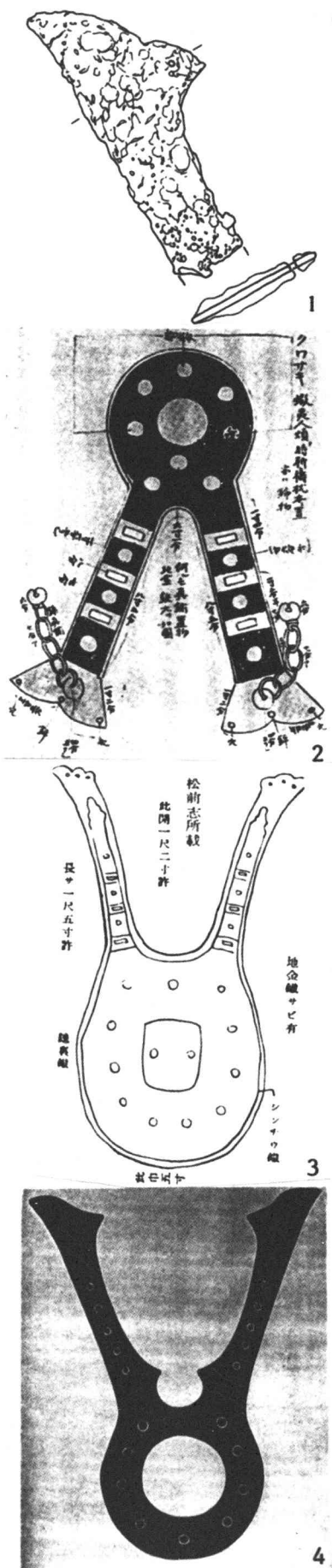


図9 古記録にみられる鍬先と発掘資料

表2 鍬先出土地一覧表

遺跡名	伴出品	長さ cm	文献	備考
栗山町角田村桜山		45.5	阿部 19, 金田一・杉山 43, 高橋 29, 東京国博編 92	本論図 8-1, 大正 5 年 6.6 発見
同		47.5	同	本論図 8-2 同
同		48.5	同	本論図 8-3 同
同			同	本論図 8-4 同
同		46.3	同	本論図 8-5 同
同			同	本論図 8-6 同
同			同	本論図 8-7 同
積丹町小泊観音寺境内	鍋, キツネ頭骨		犀川会編 33, 杉山 33, 金田一・杉山 43	本論図 8-8, 明治 26 年 6.9 発見
同	同	42.4	同	本論図 8-9 同
小樽市			宇田川編 84	北海道出土とあるが出土地不明
瀬棚町	鏝, 切羽, 刀縁頭他		阿部 19, 高橋 29	明治 17 年発見
森町湯の崎の丘			阿部 19, 高橋 29, 蝦夷島奇観, 蝦夷漫画	宝暦元年発見, 数枚
八雲町落部			児玉 71	本論図 9-4
厚真町	筋兜		宇田川校註 83	明治 32 年発掘, 散失
札幌市南 1 条	星兜, 刀		宇田川編 84, 犀川会編 33	本論図 8-10
札幌市北 2 条西 1 丁目	太刀, 兜, 木製矢尻		阿部 19, 高橋 29	旧農学校地内, 明治 20 年 7.14 発掘
同	太刀, 鉾, 内耳鍋		阿部 19, 高橋 29	明治 22 年 7.21 発掘
札幌市北 1 条西 18 丁目	太刀, シトキ, 兜		阿部 19, 高橋 29	旧養蚕所付近, 明治 20 年 7.13 発掘
札幌市北 1 条西 8 丁目	太刀, 鏡, 鍋他		阿部 19	明治 22 年 7.14 発掘, C416 遺跡か
深川市納内 3 丁目付近	人骨, 煙管, 太刀		阿部 19, 高橋 29	明治 35 年頃発見
静内町シベチャリ山中		43.9	高橋 29, 杉山 26	本論図 8-11, 安政 4 年 8 月発見
静内町			松前志	寛文 10 年ジャクシャインの戦い後, 松前家に献納
平取町額平川 2, 6 号土坑	刀, 刀葬具, 刀子他		川内編 90	本論図 9-1, 鍬先先端部のみ残存
斜里町			宇田川編 84	河野広道網走にて所見, 銅製

- | | | | |
|----|-------|-------|-----------------------|
| 10 | 松前慶長 | 松前志 | 天明元年 (1781) |
| 11 | 橘 南谿 | 東遊記 | 天明 5, 6 年 (1785~1785) |
| 12 | 古河古松軒 | 東遊雑記 | 天明 8 年 (1787) |
| 13 | 佐藤玄六郎 | 蝦夷拾遺 | 天明 6 年 (1785) |
| 14 | 秦 憶丸 | 蝦夷島奇観 | 寛政 11 年 (1799) |

さらに高橋勇 (1929) は以上に追加して,

- | | | | |
|----|------|------|-------------|
| 15 | 島津重豪 | 成形図説 | 文化元年 (1804) |
|----|------|------|-------------|

を挙げている。そして高橋は、これらを検討した結果、鍬先は「冑の鍬形より生じたるもの」とみて、「昔の武人が使用した鍬形が武威そのものゝ象徴であるかの様に信じ宝物を崇拜する事よりして、やがては模造品が作られそれをあがめるに至った」(p.21) と結論している。さらにアイヌはこの鍬先を「尊重して災厄を払ふために祀ったといふ事を鍬先の起原と見るのが、最も当を得たことゝ思はれるのである」(p.31) としている。ちなみに明和 6 年の伊勢貞丈『蝦夷鍬先考』(國學院大学附属図書館資料) を引用しておこう。「軍器考曰 蝦夷人所、為、寶者有、称、鍬先、之物、其国人病則立、之干枕上、以攘、災」とみえる。つまり、前に引用した河野広道のように病気の時に枕頭に立てておくと災いを祓うことができるという内容である。

ところで、これらの古記録を再検討した富水慶一の論文がある (富水 2000)。新たな史料として、『正徳五年松前志摩守差出候書付 追而差出候書付』(正徳 5・1715 年), 松前徳廣『蝦夷島奇観補注』(文久 3・1806), 新井田孫三郎『寛政蝦夷乱取調日誌』(寛政元・1789 年), 松宮観山『蝦夷談筆

記』(宝永7・1710)などを取り上げているので参照いただきたい。なお、図9右側の2～4は富水も扱っているものであるが、2は『蝦夷志附図』、3は『松前志』、4は八雲町^{おとしべ}落部のアイヌが使用したものと説明される資料(児玉1971)である。

以上、ひじょうに特殊な鍬先を考えてみたが、それがアイヌにとって宝物(ikor)であり、かつ威信財であったことを認めることができるであろう。次いで、いわゆる中世・近世の考古資料としこれも稀有な鏡について考えてみる(図10)。

1～8・11は余市町大川遺跡出土の鏡である。1～3は3体以上の合葬火葬墓である迂回路地点P-9号墓の副葬品の和鏡とされる(安西他2001)。太刀・刀子・刀装具金物・骨鏃などとともに出土している。4も迂回路地点P-42号墓出土で、箱状の板・櫛・紐状の繊維の上にこの和鏡と漆器が重なって置かれていたとされる。他に刀子も出土(安西他2001)。これらの墓は中世に属するといわれる。5は道道地点P-47号墓の和鏡で、漆器碗とともに副葬されていた(安西他2001)。中世に属する。6～8は大川遺跡の遺構外出土の青銅製の和鏡である(乾・小川2000)。6は菊花散双雀鏡で製作時期は室町時代末期、7は菊花(?)双雀鏡で室町時代後期、8は他と比較してやや小型で柄がついている竹梅竹垣図柄鏡で江戸時代後期の製作という(青木1996)。9は余市町入舟遺跡GP-1号墓出土の菊水双雀鏡、10は同遺跡遺構外出土の菊花双雀鏡である(岡田・宮1999)。ともに青銅製で、前者の製作年代は室町時代中期～後期、後者は13世紀末ないし14世紀初頭とされる(青木1996)。11は1924年に大川遺跡から出土したと伝えられているものである。黄銅製の唐花双雀鏡で南北朝時代の14世紀中葉の和鏡とされる(青木1996)。

図11-12は千歳市末広遺跡IP-90号墓出土の和鏡である(田村他1981)。室町時代後期の製作と考えられている。他に穿孔ある自然石・北宋銭(天禧通宝・景祐元宝・紹聖天寶)が副葬されている。13～15は寿都町朱太川左岸アイヌ墓出土の資料である(大場他1963)。13は1号墓出土で、菊花と双鶴を配した室町時代の製作の青銅製鏡である。14も1号墓の副葬品で、山川・松・鶴を配した青銅製の鏡である。鎌倉時代末期とされる。他の副葬品としては青銅製の簪があるのみである。15は所属不明の副葬品とされ、「見日之光長不相応」の銘帯をめぐらし「張小山造」の鑄出しで「見」「日」の二字が隠れているとされる。宋鏡(日光鏡)という。

以上が多くはアイヌ墓の副葬品として伴った鏡である。これらは本州製品あるいは本州経由の中国製品で、いわゆる威信財としてあるいはikor的存在としての資料的価値が高いものである。これに類するものとして、アイヌ社会で女性の持物として重要な役割を果たしてきたものがある。それはシトキ(sitoki)といわれるもので、「鏡」あるいは「垂下せる飾りを有する首飾」を意味し、玉飾り=タマサイ(tamasay)の下端についているのがsitokiなのである。ふつうは鏡のように光る円板状の金属板が用いられている。青木豊はアイヌによる和鏡の使用について述べている。「アイヌにとって鏡は、鏡の物を映ずると言った映像具とはまったく隔絶したものであって、あくまで宗教的儀式に供されたもので、このことは鏡の出現時以来よりの精神観念の産物としての鏡の合わせもつ一面を象徴するものと把握できよう…アイヌの鏡は単品として用いられる事は決してなく、アイヌ玉等によって構成される頸飾りの『飾板』として使用されるのを常としている」(青木1996:32)という。この飾板がsitokiなのである。さらに述べている。「要するに飾板は、光沢を発する金属性のものであれば良しとされたようであるが、抜本的には光るものは邪を払うという基本観念がアイ

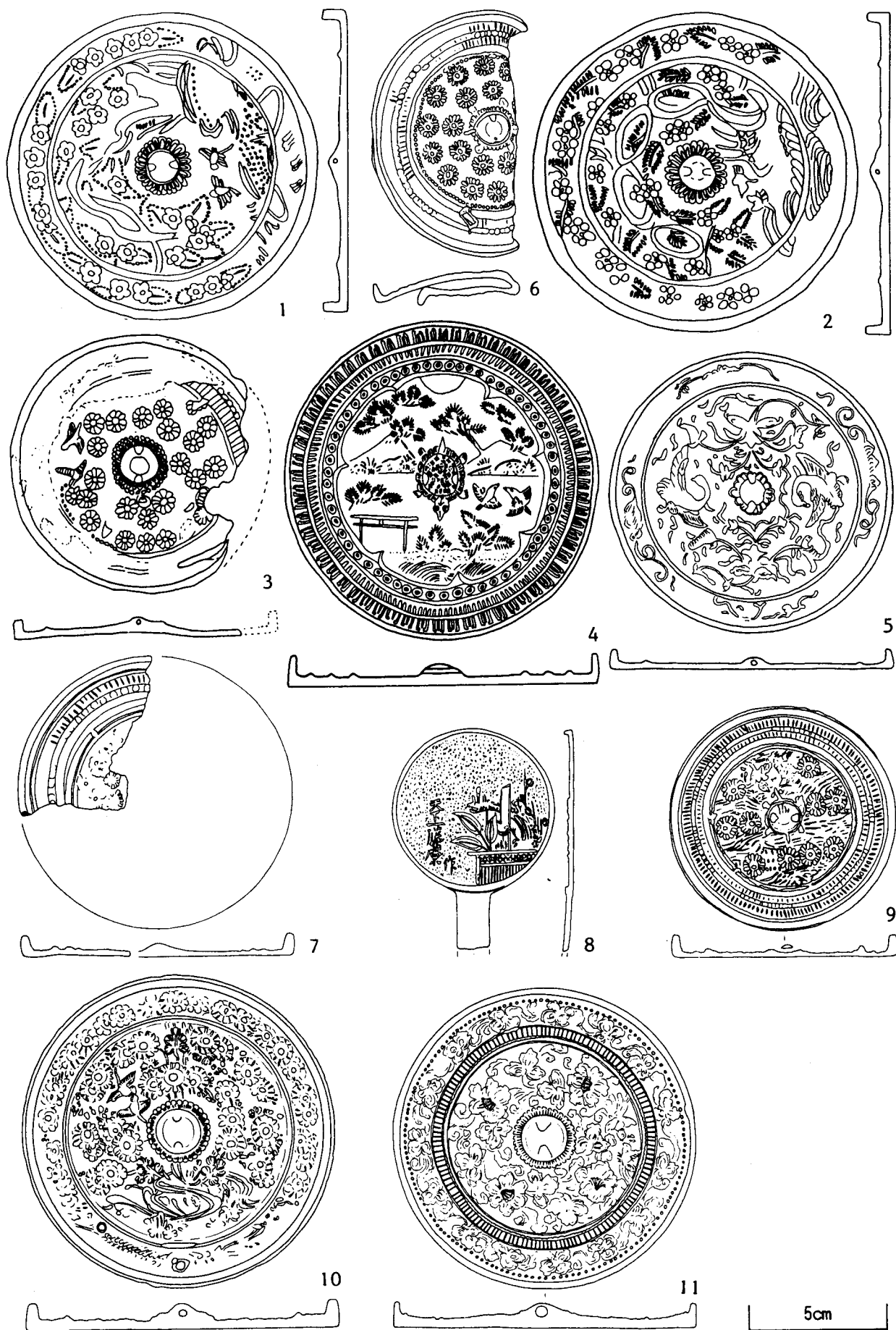


図10 中世・近世の鏡

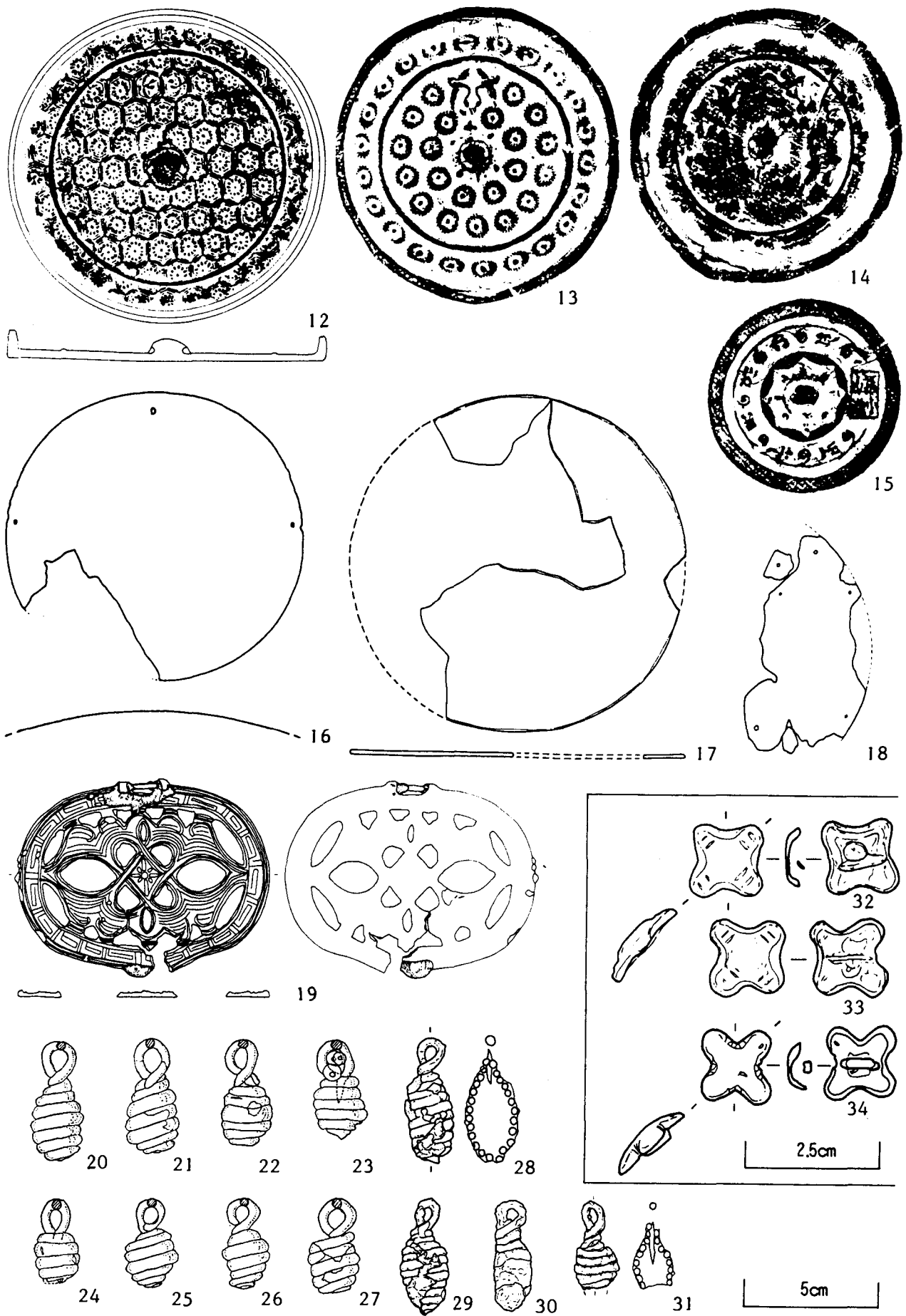


図11 中世・近世のikor的資料 (34:オホーツク文化)

表3 鏡出土地一覧表

遺跡名	伴出品	直径・厚さ cm	時期	文献	備考
余市町大川迂回路地点 P-9 墓	太刀、刀子、刀葬具、骨鏝	10.0・0.9	中世	安西他 01	本論図 10-1
余市町大川迂回路地点 P-9 墓	同	11.5・0.8	中世	安西他 01	本論図 10-2
余市町大川迂回路地点 P-9 墓	同	8.7・0.7	中世	安西他 01	本論図 10-3
余市町大川迂回路地点 P-42 墓	箱、櫛、紐、漆器、刀子	9.7	中世	安西他 01	本論図 10-4
余市町道道地点 P-47 墓	漆器	10.1・10.7	中世	安西他 01	本論図 10-5
余市町大川		9.1・0.7	室町末期	乾・小川 00, 青木 96	本論図 10-6, 菊花散双雀鏡
余市町大川		(10.0)・0.8	室町後期	乾・小川 00, 青木 96	本論図 10-7, 菊花? 双雀鏡
余市町大川		6.0・0.2	江戸後期	乾・小川 00, 青木 96	本論図 10-8, 竹梅竹垣図柄鏡
余市町大川		11.0・0.8	南北朝	青木 96	本論図 10-11, 唐花双雀鏡
余市町入舟 GP-1 墓		8.1・0.8	室町中-後期	岡田・宮 99, 青木 96	本論図 10-9, 菊花双雀鏡
余市町入舟		11.3・1.0	鎌倉末期	岡田・宮 99, 青木 96	本論図 10-10, 菊花双雀鏡
千歳市末広 IP-90 墓	北宋銭 3	11.6・0.3	室町後期	田村他 81	本論図 11-12
寿都町朱太川左岸 1 号墓	青銅製簪	10.5・0.8	室町	大場他 63	本論図 11-13, 菊花双雀鏡
寿都町朱太川左岸 1 号墓	同	10	鎌倉末期	大場他 63	本論図 11-14, 山川松鶴鏡
寿都町朱太川左岸		7.2・1.1		大場他 63	本論図 11-15, 宋鏡

ヌには強くあるようであり、鏡をシコルントンビ（眼の光るもの）と呼称するところからも、飾板は基本的に円形を呈し、光を放つ鏡である事を第一義としたものであって、それはシャーマンが邪気を払う呪物に鏡を用いるのに基本的には通ずるものと考えられる」（p.33）と。

ではここで、この sitoki に相当する考古資料をみておこう。図 11-16 は阿寒町下仁々志別遺跡のアイヌ墓出土の真鍮製の首飾りの飾板である（西・松田編 1983）。ガラス玉（蜜柑玉 2、管玉 1、丸玉 255）・刀子・吊耳鉄鍋とともに副葬されていた。17 は瀬棚町南川 2 遺跡 4 号墓に伴った sitoki と考えられている円板状銅製品である（田部・田村 1985）。アイヌ玉（蜜柑玉 3、丸玉 3、平玉 120）・鉄鍋・漆器片が副葬されていた。15 世紀初頭から 17 世紀中頃までの年代といわれている。18 は根室市コタンケシ遺跡のアイヌ墓出土の sitoki の一部と考えられている金属板である（川上編 1994）。他にガラス玉（409 点）・玉（2 点）・古銭（永楽通宝・洪武通宝・元祐通宝・元豊通宝・熙寧元宝・皇宋通宝・景祐元宝・祥符元宝・淳化元宝・開元通宝、16 点）・内耳鉄鍋・漆碗・銅製金具つき木製品などがある。近世アイヌ期とされているが、内耳鉄鍋から 15 世紀から 17 世紀前葉の年代が考えられるものである。

以上、アイヌ墓から出土した sitoki と考えてよい金属製円板をみてきた。ガラス玉を伴う tamasay あるいは sitoki は墓に副葬品として入れられることはほとんど無いようである（大塚 1993）が、例外的に以上の諸例を挙げることができたのである。さらに参考資料として、図 11-19 を挙げておく。余市町大川遺跡の遺構外から出土した金属製飾具である（乾・小川 2000）。sitoki の形状はふつうは円形であるが、特殊な例として大陸渡来の円形以外のものがあることを児玉作左衛門（1965）が紹介している。あるいはそのような特殊例としてこの資料を位置づけてよいのかも知れないと考えて、ここに紹介しておいた次第である。

では次に、威信財あるいは ikor の存在としてよいかどうか判断に悩むが、興味ある遺物をみておきたいと思う。それは図 11 の下段に示した鉄製コイル状垂飾品である。20-27 は常呂町ライトコロ川口遺跡のアイヌ墓から出土したものである（東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編 1980）。11 点のこの種の垂飾品があるが、ガラス玉（約 70 点）・鉄製短刀・銅製鐙とともに副葬さ

れていた。サハリンやアムール川下流域のシャーマンの飾帯につけられる金具と関連すると考えられている。15世紀頃の年代が与えられるであろう。これに酷似する資料が平取町二風谷遺跡でも遺構外から出土している（北海道埋蔵文化財センター編1986）。図の28～30であるが、他にも数点みられる。1667年降灰の樽前b火山灰（Ta-b）より下層出土で、擦文時代のもものと報告されるが、筆者はライトコロ例と同じ年代を考えている。さらに近世アイヌ期のものとして、31に示した千歳市美々4遺跡のIP-9号墓出土例がある（熊谷・藤井1998）。1点のみであるが、20～30の資料とまったく同じものである。また図示されていないが、余市町大川遺跡のGP-4号墓からも16点の螺旋状鉄製品がガラス玉40点とともに出土している（秋山・宮1994）。中世に属するとされる。これらライトコロ川口遺跡例と二風谷遺跡例については、菊池徹夫が注目している（菊池1990）。「アイヌ文化の中心地である日高沙流川流域と、オホーツク海沿岸とが、この小さな鉄製品によって確実に結ばれたのである。…その結果、日高・石狩・胆振といったアイヌ文化圏とオホーツク海・樺太方面とを結ぶ意外に太い文化交流・交易ルートが存在が立ち現われてくるのではないだろうか」（p.275）と。さらに「アイヌ文化の少なくとも一部は、むしろオホーツク海沿岸地帯で、オホーツク系文化と擦文系文化とが接触する中で形成されていったとみるべきなのではないだろうか」（ibid.）と述べている。アイヌ文化の形成過程を探る上で視点の一つに入れるべき指摘である。さらに菊池徹夫は大川資料の追加をみた後、発言している。「問題の鉄製コイル状垂飾が、我々の推測どおり本来北方系シャーマンの帯飾りのようなものと関係ありとすれば、当然、サハリン方面との交流が考えられよう。オホーツク海沿岸のみならず、遠く日高沙流川流域、さらには余市にまで、この時期こうした大陸・サハリン系の文物がもたらされている事実は重要であり、ガラス玉の流入ルートについても示唆的なのではないであろうか」（菊池1995：231）。

また、図11-32～34の注目すべき銅製品がある。32と33は平取町二風谷遺跡出土（北海道埋蔵文化財センター編1986）のもので、四弁花形で各端に2本の刻線が入っているとされる。裏には紐がつくような突起がみられる。一応は刀の飾金具に分類されているが、刀装具ではないかも知れないといわれる。直径1.7 cm、高さ0.35 cmである。34は未報告資料であるが、常呂町トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号竪穴住居址出土の青銅製品で、骨塚の傍から出土しているのでオホーツク文化に属することは確実なものである。大きさは1.65×1.69 cm、高さ0.27 cmである。裏面には紐通しがついている。四弁花形は二風谷遺跡の2点より突出している感じであるが、類似品とみなしてよいであろう。そのような例は、シベリア大陸に類例を見出すことができる。例えば靺鞨文化のトロイツコエ墓址（Деревянко 1977）やいわゆる女真文化とされるナデジンスコエ墓址、ボロニ墓址（Медведев 1977）などで出土しているのである。四弁の部分に2～4本の刻線が入る例もある。小型帯金具と呼んでおこう。この二風谷遺跡と常呂町の出土例は、奇しくも前出の鉄製コイル状垂飾品と同じ常呂町と平取町を直接に結ぶような出方である。北方系の遺物であることからオホーツク文化を経由した交易システムが存在したことを物語っているのであろう。

では最後に、アイヌ文化の中に完全に入り込んだ本州からの産品をみておこう。

それは図12に示したものであるが、上ノ国町勝山館跡出土の白磁皿である。松崎水穂（2001）や榎森進（2001）も注目しているところであるが、その底面に記号がみられるのである。そのような記号は、アイヌが所有する木碗（漆碗も含む）の底面に製作後に刻まれるイトクパ（itokpa＝祖印）

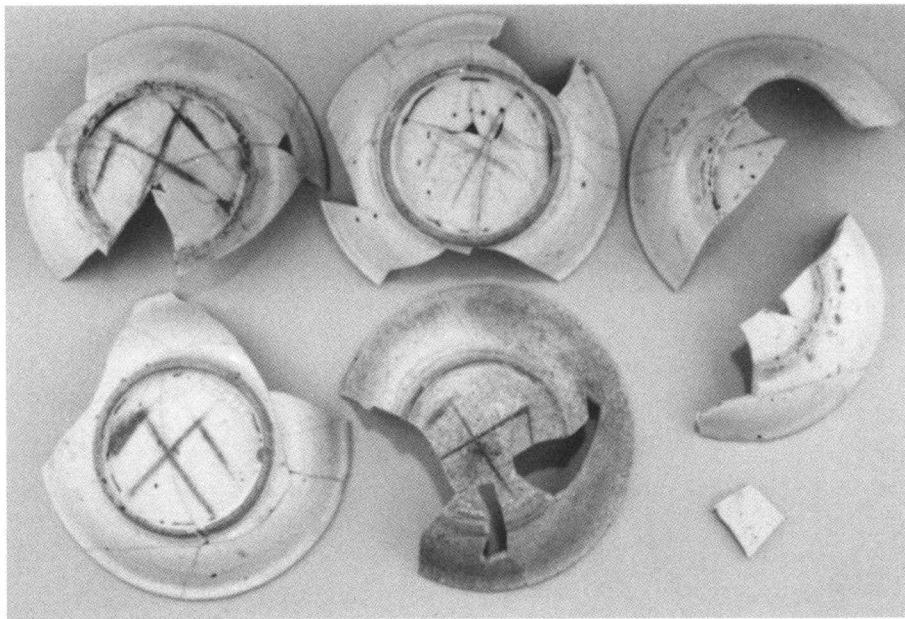


図12 sirosiが刻まれた勝山館跡出土の白磁皿（上ノ国町教育委員会蔵）

あるいはシロシ（sirosi＝印）と同じ目的で、本州から搬入された後で刻まれたものである。勝山館跡からは他にも天目茶碗や黄天目あるいは鹿角製マキリの柄、マキリの鞘、矢筒？、漆碗などにsirosiが刻まれている遺物がみられる。天目茶碗や漆碗はこの白磁皿と同様に本州から搬入されたもので、勝山館に住んでいた和人が本来所有していたものであったはずである。それが同居していたアイヌに渡され、アイヌが自らsirosiを刻んだのであろう。おそらくikoric的存在として扱っていたことと推量される。ちなみに小野正敏は、「戦国時代に好まれた骨董品」として白磁梅瓶・四耳壺、青磁盤、青磁酒海壺、青磁花生、青磁太鼓胴盤、天目茶碗・茶入、元代染付などを挙げ、それらの希少品の15～16世紀の東国の城館址の中での位置づけを考えている。そしてそれらを威信財として扱っているのである。勝山館跡の場合も青磁盤や青磁花生、天目茶碗などが出土しており、「日常の生活用具としての陶磁器などを大量に消費する富と経済力、その手段は持っていたが、政治権力や権威を誇示するための威信財は非常に少ないという特徴を示しています」としている（小野 2001：318）。勝山館の館主のこのような威信財に対する考え方と、そこに同居したと考えられるアイヌの人たちのsirosiを刻んだ白磁皿という威信財は、今後の研究課題となってくるであろうと考える次第である。

5. 結びにかえて

以上、擦文文化・オホーツク文化そしていわゆる中世・近世のやや特殊な遺物をみてきた。それらを「威信財」あるいは「ikoric的存在」として考えてみたのである。それには本州産品の南からの流入があり、またオホーツク文化を経由しての、あるいは中世段階ではサハリン経由の北方からの交易品が認められた。さらに朝鮮半島や中国の品も入ってきているが、それらの交易ルートはまだ不確かであるが本州経由と考えてよいであろう。

ところでそのような物質文化の交易であるが、今回取り上げたように、オホーツク文化の目梨泊遺跡とモヨロ貝塚は、擦文文化と中・近世の余市町大川遺跡と同様に、他とは比較にならないほど多量のikoric存在資料を出土している。そのことはこれら三時代の遺跡はそれぞれオホーツク文化と擦文文化および中・近世の重要な拠点であったことを意味していると考えられる。すなわち拠点港であったとみることができるのである。それは、海流の流れと穏やかな湾内の泊港としての立地

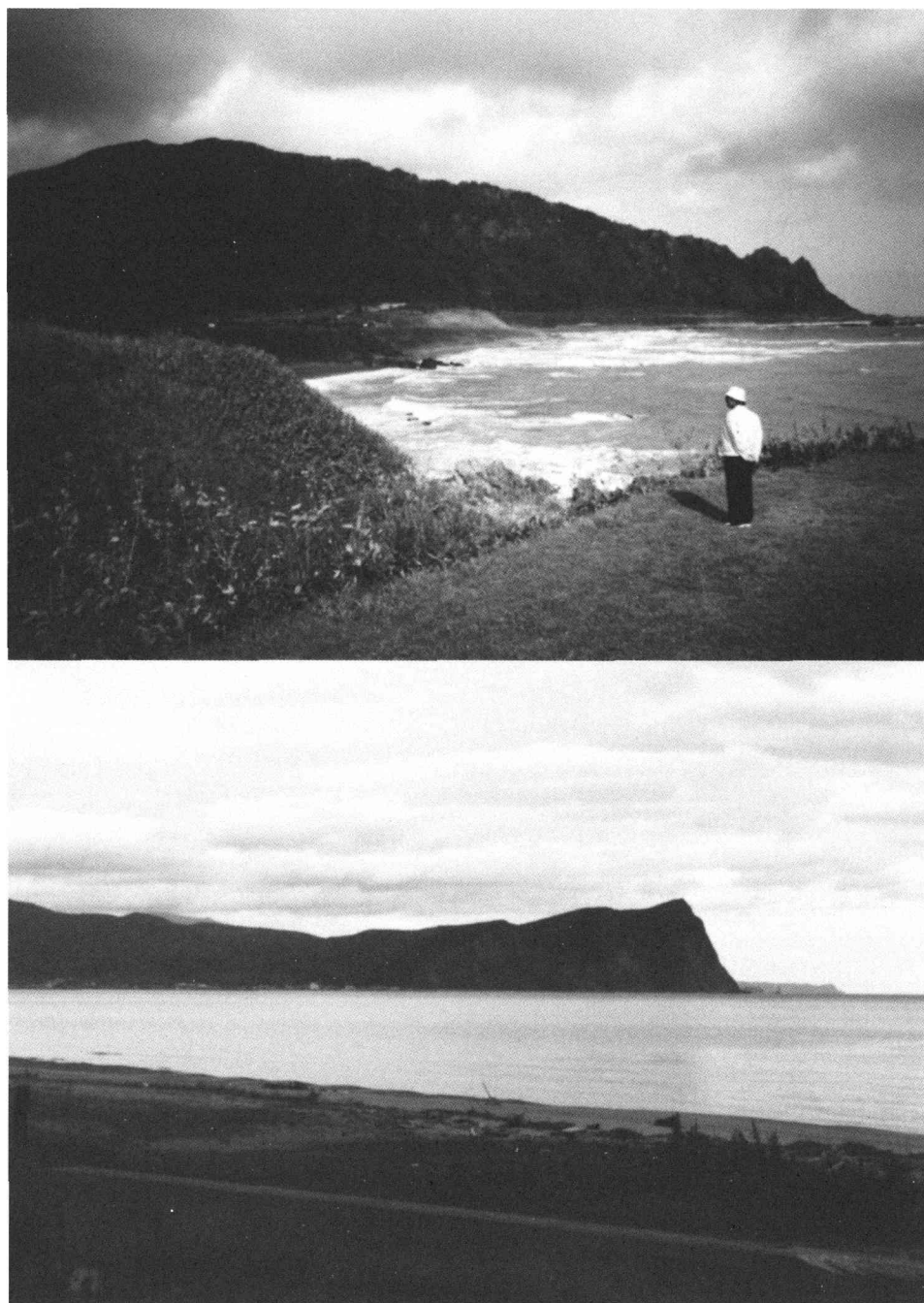


図13 目梨泊遺跡（上）と大川遺跡（下）付近の環境

条件からも言えることである。例えば図13に目梨泊・大川遺跡付近の環境を示しておいた。上の目梨泊遺跡の場合は、断崖絶壁の^{かむいどき}神威岬の陰の小入江奥地に立地している。この神威岬は、山田秀三によると、「岩岬が海中に鋭く突き出していて、アイヌ時代はカムイ・エトゥ（kamui-etu）と呼ばれた」とされ、さらに目梨泊は「メナシ・トマリ menash-tomari 東風（の時）の・泊地」と解釈され「東側に細長い岩岬が長く出ていて今目梨泊岬という。それが防波堤のようになっているので、東風の荒れる時には正に有難い停泊地になったことであろう」（山田 1984：171）と説明されている。下の写真の大川遺跡付近は、シリパ岬と呼ばれる断崖絶壁の岬があり、その陰の小入江の奥地に立地しており、目梨泊と同じ景観にある。同じく山田秀三によると「余市市街の西側に高いシリパ岬が海中に突き出していて、小樽の東の方からでもよく見える。シリパはシリ・パ（山の・頭）の意で、海中に突き出している岬のことである」（p.486）とされている。

ところで、瀬川拓郎は擦文時代の交易を考えている（瀬川 1997）。つまり、擦文時代初期には「北海道土師集団」（道南から道央にかけて東北北部の土師器文化を担う本州系の人々）がイニシアティブをとり、各地の在地集団に本州産品を流通させた「求心性の強い交易体制」の「初期求心性交易」を想定している。大川遺跡の鍔帯金具などを視座に入れている。9世紀後葉頃は「地域的交易」（多元的交易体制）が確立したとされ、例えば北部日本海沿岸では河口港としての性格を強くもつ集落遺跡を考えている。この頃のオホーツク文化集団も、「擦文文化の地域社会と本州産品の安定的な流通をみるに及んで、擦文社会との交流はもはや不可避なものとなっていくと思われる」（p.23）といわれる。10世紀後葉頃は、日本海沿岸の交易を「日本海沿岸集団」が、太平洋沿岸の交易を「太平洋沿岸集団」が本州北端に積極的に進出していったとしている。11世紀中葉は、「道東部集団」がクリール諸島に進出し、11世紀中葉以降は交易の前線を拡大し、本州から北方社会に至る広大なネットワークを自ら築き上げていたという。

これに対して、12～16世紀の中世陶磁器の北海道での出土地を検討しているのが吉岡康暢である。そしてそれらから得られた結論として、「14世紀初めころを上限として大川中世遺跡に代表される和人集団が、港湾を核とするアイヌ集団との交易場ないし特産物を直営的に調達する基地を、余市と鶴川を結ぶ道南の河口部に一斉に設営したと述べている（吉岡 2001：437）。ここにも大川遺跡が果たした役割が現われている。吉岡は「北日本の中世遺跡と交易ルート」という図を示しているが、それをもとに一部改変して、ここで扱った擦文文化の遺跡とオホーツク文化の遺跡などを加えて図14のような図を作成してみた。本州からの交易ルートの細い破線は太平洋沿岸、石狩川流域、旭川・深川～小平、天塩川流域、沙流川流域を延長させて示しておいた。さらにオホーツク文化の流れ換言すれば北方交易ルートを太い破線で示している。この図では、日本海側では天塩地方で南と北のルートの接点がみられ、太平洋側では根室地方に接点を置いている。今後は内陸ルートの探究も要求されるところであるが、現状ではこのような主に海岸線をめぐる交易ルートしか考えることができないのである。Renfrewの交換モードをより具体的に述べるには今少しの時間を必要としているといえよう。

では以下に、チャシに宝物（ikor）とされるものが収められている例をみておく。

松前廣長の『松前志』（1781）には「夷方にて不義をなし、或は罪あるものには、宝物を出さずるを法とす。是をツクナイと云ふ。法に背きて財を出さざれば、闘争に及ぶなり。…故に大邑の酋

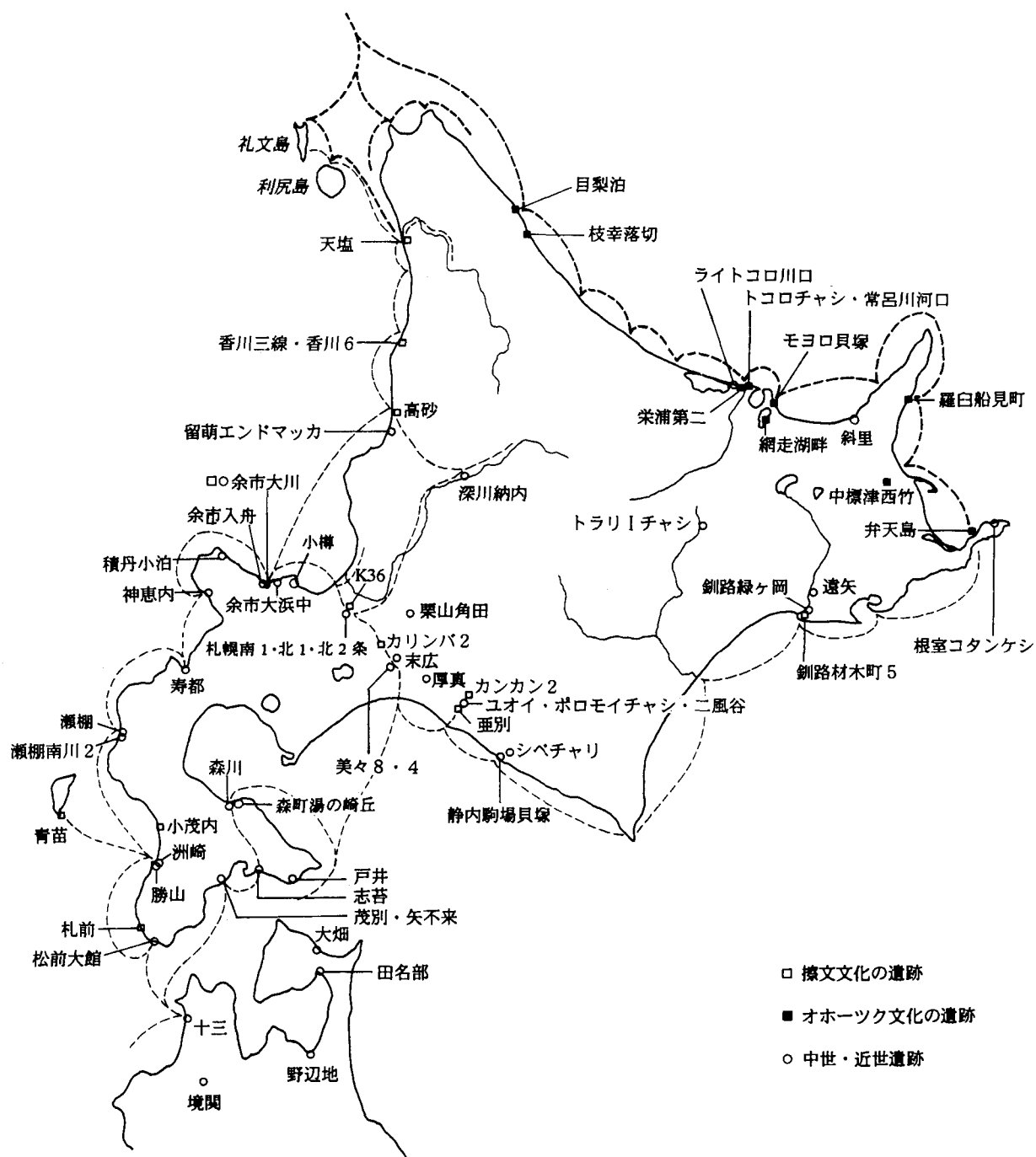


図14 擦文・オホーツク文化と中世・近世遺跡（吉岡2001を元に加筆）

豪たるものは必ず一郭の高山をチャシと名けて、此によるなり」とみえる。

立松東作の『東遊記』（1783）では「東蝦夷地に大きなチャシ持たる者有。…四間に六間の蔵三ヶ所其上にあり。…蔵にはさまざまの重宝又は干魚の類を貯へ置しと云」と記録されている。

また荒井保恵の『東行漫筆』（1809）では「クナシリのツキノエクスリの乙名タシヤニシと申も

のたがひにあらそひてツキノエのかたよりたから物を奪ひに来るとき、急でクスリの夷人タシヤニシを大将として弓矢竹槍を持て此チャシに集まりたと云」とある（アンダーラインは筆者）。釧路市カツラコイチャシを指していると考えられる。

チャシには、「宝物」「重宝」「たから物」という表現でikorが置かれていたことがみえるのである。これらの他にチャシにまつわる伝承にも宝物が登場しているので、それを拾い上げておこう。それには「実在のチャシ」の他に伝承や地名あるいはユーカラ（yukar）だけに残る「カムイチャシ」も含めておく。また、参考資料は宇田川洋編（1981）を基本とし、A-2などの記号は参考資料による伝承の分類である。

- 1 礼文町チャシュトマリのチャシ：対天塩・増毛・磯谷アイヌ，A-2，宝物とその埋納
- 2 愛別町イカウシのチャシ：対十勝アイヌ，A-2，topattumi（盗賊）と宝物
- 3 新十津川町チャシケショマナイのチャシ：F，強盗と財宝
- 4 余市町天内山チャシ：対虻田アイヌ，A-2，宝物
- 5 平取町オタリオマップチャシ：対十勝アイヌ，A-2，topattumi（宝を狙う謀叛人）と宝物
- 6 平取町アペッチャシ：F，秘密倉庫に宝物を埋納
- 7 様似町エンルム岬チャシ：B-1，宝物掠奪
- 8 陸別町ユクエピラチャシ：対厚岸アイヌ，A-2，宝物岩穴隠し
- 9 浦幌町オタフンベチャシ：対厚岸アイヌ，A-2，宝物
- 10 釧路市カツラコイチャシ：対北見アイヌ・国後アイヌ，A-2，鎧・刀・家宝
- 11 釧路市ハルトリチャシ：対根室・厚岸アイヌ，A-2，宝物洞窟隠し
- 12 釧路市モシリヤチャシ：F，宝物（飾太刀・角盥）と熊皮・鷲羽の交換
- 13 阿寒町ボンタッコブチャシ：対厚岸アイヌ，A-2，ikasitumi⁽⁵⁾（集団強盗）と宝物
- 14 白糠町サシウシチャシ：対厚岸アイヌ，A-2，ikasitumi（盗賊）と宝物
- 15 厚岸町^{さかきんこ}逆水松チャシ：対阿寒・塘路・屈斜路・網走アイヌ，A-2，世襲の宝物
- 16 根室市ノッカマフチャシ：A-2，宝物隠し
- 17 根室市ホニオイチャシ：対千島アイヌ，A-2，宝物掠奪
- 18 標津町ソーケショマナイのチャシ：対北見アイヌ，A-2，財宝
- 19 紋別市チウエンチャシ：対日高アイヌ，A-2，宝物
- 20 網走市桂ヶ岡チャシ：対湧別・紋別アイヌ，A-2，宝物掠奪

以上、管見の限りでは20のチャシとikorが結びつく例を拾い上げることができた。そして、そこにはikorを土中や秘密倉庫に埋納するとか岩穴や洞窟に隠すといった行為がみられる。そのことは、前述の鋏先のようなikorの扱いと同様に考えることができるであろう。すなわち、事ある時に鋏先を取り出して祈祷すると悪神を祓い、怨敵も退けるが、通常時は山地の穴（kimuspu⁽⁶⁾）に隠したりする行為である。ここにikorとチャシの関係が認められるのである。ちなみに平山裕人は平取町アペッチャシの「秘密倉庫（キヤムスプ＝kimuspu）」伝承をもとに次のように述べている。すなわち「同伝承は、チャシがアイヌの中でも富裕層でなければ所持できないことを伝えている。また、チャシを持たないアイヌも宝物（富）を求め、それを集積したことを伝えている。このことはチャシ構築が単に集落間の争いに応じて行われただけでなく、集落内においても富裕を象徴する建造物で

あったことを知らせる。要するにチャシ構築の原動力は、集落間・集落内にかかわらず、富を求める競争であったとすることができる」(平山 1994 : 311) と。

また、この ikor とチャシの結びつきの他に ikor の掠奪行為がみられたが、そこには topattumi が多く関係している。すなわち topattumi とは、「夜討・夜襲」(知里 1956 : 132) とか「群盗；かつてあったと伝えられる集団強盗。村ぐるみで他村を襲い、財宝を奪って村人をみなごろしにする」(中川 1995 : 287) という意味であるという。2・3・5・13・14 のチャシでみられたが、他に、

- 21 枝幸町川尻チャシ：ikkatumi⁽⁷⁾ (無頼の徒)
- 22 穂別町ノットカチャシ：部落荒し
- 23 穂別町ハッタルシナイチャシ：topattumi (夜盗の群)
- 24 静内町ホヨチャシ：軍盗団
- 25 平取町ヌベルンナイチャシ：夜盗の一群
- 26 平取町ウコレイチャシ：topattumi
- 27 平取町ニオイチャシ：topattumi
- 28 平取町ウンチャシ：topattumi
- 29 平取町サルパチャシ：topattumi
- 30 門別町アッペツチャシ：野盗
- 31 本別町ニカルシピラチャシ：topattumi
- 32 足寄町トメルベシベのチャシ：夜盗
- 33 阿寒町ベルプナイのチャシ：強盗団

などのチャシに topattumi 他の伝承が見出せるのである。このような諸例は直接に ikor と結びつかなくても、その内容に ikor の掠奪を目的としている場合も多くあったであろうことは推測に難くない。この topattumi に関しては扇谷昌康 (1980) がすでに触れている。まずトゥミルペシベ tumi-rupespe なる地名が残っているが、それは夜盗が山越えして下ってくる路の意味であるという。日高地方の沙流川筋と波恵川筋、十勝地方の利別川筋に残っているとされる。そしてこれらの tumi-rupespe が topattumi にかかわる故事に由来するアイヌ語であることを指摘しているのである。現在の状況では、チャシと ikor そしてそれをめぐる topattumi の事例と内容をここまでしか追求できないが、これらの研究課題こそ、渡辺仁が指摘したチャシの社会的意義を理解する社会考古学的視点なのであろう。

このアイヌ社会の ikor に関して注目した岩崎奈緒子は、別に以下のように結論している。「アイヌは、刀剣ほかの金属類、漆器類や玉、織物など、日本をはじめとして、カラフト・千島列島など外部からの移入品を『宝』として珍重した。アイヌが和人との交易を希求した要因として注目されるのは、この『宝』が紛争・契約といった社会生活上の重要な局面で授受されるという、アイヌの社会構造の特質である。『宝』は、紛争の際には、賠償を意味するツグナイに当てられた。ツグナイの授受が成立すれば解決、成立しなければ武力闘争へという二つの段階があり、ツグナイは武力闘争を回避する機能を持っていた。ツグナイを要求された側が、その要求に応じることができない場合には、『宝』を支払うかわりに、人身を差し出す場合があった。有力アイヌ集団のウタレはこうして再生産されており、『宝』の保持は、アイヌの社会的な立場を決める不可欠の財であった。人的な協力関係をはじめとして、種々の契約を結ぶ際には、『宝』が証拠として授受された。これは

手印と呼ばれる。漁業の領域を決める場合にも、手印がやりとりされ、生業を行う上でも『宝』は不可欠の品であった。このような社会において、『宝』をより多く持つ者が、社会的に有利な立場にあったことは想像に難くない。有力アイヌは『宝』を集積しており、その勢力はこの『宝』によって支えられていたのである」(岩崎 1998: 233-234)。

アイヌ社会においてikorの占める比重の濃さがここに表現されているが、今回ここで扱ったような「ikor的存在」とした考古資料が、各時代時代で果たした社会的役割を究明するための参考となれば幸いとするところである。

註

- (1)——鳥居龍蔵がいう「蝦夷アイヌ」には国後・択捉島のアイヌも含んでいる。
- (2)——The Chukchee. Memoirs of the American Museum of Natural History. Vol.XI. New York. 1904-1909.
- (3)——7点の資料のうち4点(図8-1~3・5)は重要美術品指定で東京国立博物館蔵となっている。
- (4)——高橋勇(1929)は「男孫太」としているが、杉山寿栄男(1926)では「松浦孫太郎」とある。
- (5)——ika-si-tumi(越える・それ・戦い)と解釈すべきであろうか。
- (6)——前述の杉山寿栄男(1926)ではキムシプkimushpuとなっているが、中川裕(1995: 158)によると、キムシプkimuspuとあり、「盗賊にとられないように宝物などを隠した山中の洞窟」であるという。
- (7)——ikka-tumi(盗む・戦い)の意味であろう。

引用・参考文献

- 青木 豊 1996 「入舟遺跡・大川遺跡出土和鏡」『1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
- 秋山洋司 1997 「K36遺跡タカノ地点」札幌市文化財調査報告書56
- 秋山洋司・宮 宏明 1994 「大川遺跡検出のアイヌ墓について」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会: 81-83
- 阿部正巳 1919 「アイヌの鋳先に就きて」『北海道人類学会雑誌』1: 33-41
- 安西雅希・岡崎次郎・乾 芳宏 2001 「余市町大川遺跡(1999年度)」余市町教育委員会
- 石井昌国 1966 「巖手刀」雄山閣
- 乾 芳宏・熊崎農夫博 2000 「大川遺跡における考古学的調査Ⅱ」余市町教育委員会
- 乾 芳宏・小川康和 2000 「大川遺跡における考古学的調査Ⅲ」余市町教育委員会
- 岩崎奈緒子 1995 「前近代アイヌの「宝」とその社会的機能」『史林』78-5: 107-128
- 岩崎奈緒子 1998 「日本近世のアイヌ社会」校倉書房
- 右代啓祝 1990 「北海道常呂町出土のオホーツク式土器—加藤正コレクション—」『北海道開拓記念館調査報告』29: 1-16
- 宇田川洋 1983 「擦文社会の木製品の位置づけ」『考古学ジャーナル』213: 4-7
- 宇田川洋 1988 「アイヌ文化成立史」北海道出版企画センター
- 宇田川洋 1989 「イオマンテの考古学」東京大学出版会
- 宇田川洋 1994 「解説と主要文献」『アイヌのチャシとその世界』北海道出版企画センター: 319-331
- 宇田川洋編 1981 「アイヌ伝承と砦」北海道出版企画センター
- 宇田川洋編 1984 「河野広道ノート(考古篇5)」北海道出版企画センター
- 宇田川洋校註 1983 「河野常吉ノート(考古篇2)」北海道出版企画センター
- 上屋真一他 1998 「カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点」恵庭市教育委員会
- 榎森 進 2001 「アイヌ民族の去就(北奥からカラフトまで)」『北から見直す日本史』大和書房: 27-124
- 大沼忠春 1965 「中標津町管内の遺跡」『釧路の古代文化』7: 15-18
- 大場利夫 1962 「モヨロ貝塚出土の金属器」『北方文化研究報告』17: 1-32
- 大場利夫・棚瀬善一・金子有明 1963 「寿都遺跡」寿都町・寿都町教育委員会
- 大塚一美 1993 「首飾りと巫術」『北海道チャシ学会研究報告』7: 27-45
- 扇谷昌康 1980 「トバット」ミ伝承のあるアイヌ語地名」『北海道の文化』42: 33-37
- 岡田淳子・宮 宏明 1999 「入舟遺跡における考古学的調査」余市町教育委員会
- 小野正敏 2001 「遺跡・遺物の違いから見た北と畿内」『北から見直す日本史』大和書房: 291-320
- 葛西智義・皆川洋一・越田賢一郎 1992 「深川市納内出土の遺物について」『北海道考古学』28: 19-31

- 葛西智義・皆川洋一・越田賢一郎 1993 「深川市納内出土の蔵手刀について」『北海道考古学』29：37-46
- 川上 淳編 1994 『根室市コタンケシ遺跡発掘調査報告書』根室市教育委員会
- 川内 基編 1990 『北海道平取町額平川2遺跡』平取町遺跡調査会
- 菊池勇夫 1994 『アイヌ民族と日本人』朝日新聞社
- 菊池勇夫 1999 「松前藩とアイヌ」『白い国の詩』5-4, 東北電力株式会社地域交流部：4-13
- 菊池徹夫 1990 「アイヌ史と擦文文化」『北からの日本史2』北海道・東北史研究会編, 三省堂：261-278
- 菊池徹夫 1995 「遺跡に見る中世蝦夷地の風景」『中世の風景を読む1—蝦夷地の世界と北方交易—』新人 物往来社：199-236
- 菊池俊彦 1976 「オホーツク文化に見られる鞆靴・女真系遺物」『北方文化研究』10：31-117
- 北構保男・山浦 清 1982 「根室市弁天島遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』67-3：115-118
- 金田一京介・杉山寿栄男 1943 『アイヌ芸術』第三卷（金工・漆器篇）（北海道出版企画センター1993新装版復刻）
- 工藤雅樹 1998 『蝦夷と東北古代史』吉川弘文館
- 熊谷仁志・藤井 浩 1998 『美沢川流域の遺跡群XIX』北海道埋蔵文化財センター調査報告書113
- 河野広道 1993 「金属器」『北海道原始文化聚英』民族工芸研究会：33-34
- 河野広道 1958 「網走市史先史時代篇」『網走市史（上）』網走市：1-270
- 児島恭子 1995 「口頭伝承とチャシ」『北海道チャシ学会研究報告』9：19-36
- 小嶋芳孝 2000 「北海道における女真系遺物の検討」『渤海との交流を示す考古資料の材質分析的研究』平成10・11年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書：35-41
- 兄玉作左衛門 1965 「江戸時代初期のアイヌ服飾の研究」『北方文化研究報告』20：1-107
- 兄玉作左衛門 1971 『明治前日本人類学・先史学史』日本学術振興会
- 後藤秀彦 1994 「陸別町の先史・先住文化の考察」『陸別町史（通史編）』陸別町：125-282
- 犀川会編 1933 『北海道原始文化聚英』民族工芸研究会（北海道出版企画センター1977復刻）
- 佐藤隆広 1994 『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
- 杉山寿栄男 1926 『アイヌ文様』工芸美術研究会（北海道出版企画センター1974復刻）
- 杉山寿栄男 1933 「蒐集家の悲哀」『ドルメン』2-8：62-68
- 瀬川拓郎 1997 「擦文時代における交易体制の展開」『北海道考古学』33：19-26
- 高倉新一郎 1966 『アイヌ研究』北海道大学生協同組合
- 高倉新一郎 1972 『新版アイヌ政策史』三一書房
- 高橋 勇 1929 「アイヌの鋏先に就て」『考古学雑誌』19-8：15-32
- 高島孝宗 1998a 「オホーツク文化における大陸系遺物の分布について」『考古学ジャーナル』436：11-15
- 高島孝宗 1998b 「オホーツク文化の墓」『環オホーツク環オホーツク海文化のつどい報告書』5, 紋別市 郷土博物館・紋別市立図書館：81-95
- 田口 尚・鈴木 信 1996 『美沢川流域の遺跡群XVIII』北海道埋蔵文化財センター調査報告書102
- 武田 修 1996 『常呂川河口遺跡（1）』常呂町教育委員会
- 田部 淳・田村リラ子 1985 『南川2遺跡』瀬棚町教育委員会
- 田村俊之他 1981 『末広遺跡における考古学的調査（上）』千歳市文化財調査報告書Ⅶ
- 知里真志保 1956 『地名アイヌ語小辞典』檢書房
- 東京国立博物館編 1992 『東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料篇』
- 東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』東京大学文学部
- 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室編 1980 『ライトコロ川口遺跡』東京大学文学部
- 富水慶一 2000 「アイヌの財宝「クワサキ」考」『北海道の文化』72：47-54
- 鳥居龍蔵 1919 「考古学民族学研究・千島アイヌ」『東京帝国大学理科大学紀要』42-1（『鳥居龍蔵全集』5, 1976：312-553所収）
- 中川 裕 1989 「口承文芸に見るアイヌ人と和人の関係」『民族接触』六興出版：73-85
- 中川 裕 1995 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
- 西 幸隆他 1989 『釧路市材木町5遺跡調査報告書』釧路市埋蔵文化財調査センター
- 西 幸隆・松田 猛編 1983 『阿寒町下仁々志別墅穴群』阿寒町教育委員会
- 平山裕人 1994 「チャシ文化と交易」『アイヌのチャシとその世界』北海道出版企画センター：309-318
- 福土廣志 1985 「北海道留萌市出土の星兜鉢および杏葉残欠について」『考古学雑誌』71-1：88-102
- 藤本 強・宇田川洋 1989 「遺跡・遺物からみた常呂」『常呂町百年史』常呂町：122-143
- 北海道埋蔵文化財センター編 1986 『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書26
- 前田 潮他 2001 『礼文町香深井6遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 松崎水穂 2001 「勝山館跡とその城下の謎」『北から見直す日本史』大和書房：181-290
- 森岡健治 1996 『カンカン2遺跡』平取町文化財調査報告書Ⅲ
- 森岡健治・長田佳宏 2000 『亜別遺跡』平取町文化財調査報告書XIII
- 八木柴三郎 1902 「蝦夷の鋏先」『東京人類学会雑誌』17-197：436-440

-
- 山浦 清 2000 「続縄文から擦文文化成立期にかけての北海道・本州間の交流—その交易システムの展開—」
『現代の考古学5—交流の考古学—』朝倉書店：73-94
- 山岸素夫 1974 「釧路市緑ヶ岡出土の星兜残欠」『釧路博物館報』229：39-43
- 山田悟郎他 1995 「オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系遺物」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館：65-80
- 山田秀三 1984 『北海道の地名』北海道新聞社
- 山宮克彦 1992 「中標津町郷土館所蔵の考古資料（その1）」『根室市博物館開設準備室紀要』6：29-31
- 山本哲也 2001 「擦文文化の祭祀」『國學院大学考古学資料館紀要』17：35-52
- 吉岡康暢 2001 「北方流通史と大川遺跡」『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』余市町教育委員会：401-448
- 渡辺 仁 1992 「チャシとイコロ—社会考古学的視点—」『新版古代の日本・月報』6、角川書店：6-8
- Деревянко, Е. И. 1977 Троицкий Могильник. Новосибирск.
- Медведев, В. Е. 1977 Культура Амурских Чжурчженей. Новосибирск.

(東京大学文学部)

A Trial Theory on the Formation of the Aynu Culture: On the Prestige Goods or the *ikor* such as Treasures

UTAGAWA Hiroshi

H. WATANABE (1992) reported that if it can put the history of *chashi* upon the history of treasure, it will be enlightend a way to understand the social meaning of *chashi* through the relation of the social structure between the *chashi* and the treasure. And he considered so that the treasures are inducements or a purpose of the struggle, both the treasures and *chashi* are the constructed element of “battle complex” in aynu.

In this paper, I consider the prestige goods or the *ikor* such as treasures that are the sword, the lacquer ware and the *tamasay* (the necklace consisting of glass balls) and so on, from Satsumon period to Modern Age.

K. YAMAURA (2000) introduced the trade as action at a distance by C. Renfrew. It is from Mode 1, the direct approach, to Mode 10, the trade at the barter port. And he arrived at the conclusion that there is Mode 4 in Epi-Jomon period and Mode 8 or 9 in Satsumon period. At present, this study of the prestige goods or the *ikor* such as treasures will give the data for searching the trade as action at a distance in aynu society.

The materials of Satsumon Culture (Fig.3)

There are some bronze bowls excavated at Biratori Town, Eniwa City and Kushiro City in Hokkaido from about 10th century to 12th century. In these materials, *Sahari*-bowls from so-called Korea Peninsula are including. And a bronze mirror, Koshu (Hu-zhou)-kyo, found at Zaimokucho 5 site in Kushiro City from Sekko-sho (Chekiang) in China, it may be 12th century. These kind of remains are of Continental origin. Another special material is laquered bowls from Honshu found in Sapporo City and Kushiro City from 10th century to 13th century. In Yoichi Town, two bronze bells (*taku*) produced from China are found in a grave pit. And so two bronze portions of belt (*katai-kanagu*) are found in same Yoichi Town, these goods may be from Honshu.

The materials of Okhotsk Culture (Fig.4)

It is a well-known fact that the iron and bronze artifacts from Mohe or Tongren Culture and Jurchen Culture in the basin of the Amur River and the Maritime Province of Siberia are found in Okhotsk Culture. There are the bronze portions of belt, the bronze, copper and tin bells (*taku* and *suzu*) and iron halberds and so on found in Eshashi Town, Tokoro Town, Abashiri City, Nakashibetsu Town and Nemuro City.

The peoples of Okhotsk Culture obtained some remains from Honshu as well as many metal artifacts

from of Continental origin. For example, the Warabite-tou which is the sword with bracken like handle, are found in Esashi Town, Abashiri City, Tokoro Town and Rausu Town.

The materials of so-called Middle Age and Modern Age (Fig.6 ~ 12)

Figs.6 and 7 are the Japanese helmets made of iron and bronze found in Rumoi City, Fukagawa City, Biratori Town, Sapporo City, Kushiro City, Rikubetsu Town, Shizunai Town and Atsuma Town. The end of hoe-like materials (kuwasaki) made of iron and copper are Figs.8 and 9 found in Kuriyama Town, Shakotan Town, Yakumo Town, Sapporo City, Shizunai Town and Biratori Town and so on. It was recorded in the old documents of Edo era that these artifacts were the treasure named kira-us tomi-kamui, the god of treasure with horn, in aynu society.

Another archaeological remains are the bronze mirrors showed Figs.10 and 11. Most of the mirrors are excavated from the grave pits of the Middle Age, and the greater part of the mirrors are made of Japan origin. Whenever the dress up time, aynu women wear the tamasay, the necklace consisting of glass balls, and the sitoki, the mirror or the disk made of metal hanging down the lower end of the tamasay. That is a matter of course the tamasay and the sitoki are the treasures in aynu society. In referred to the Fig.11 – 16 ~ 18, the brass or bronze disks like the sitoki are found from the aynu grave pits in Akan Town, Setana Town and Nemuro City.

Besides, the special artifacts at least I regard them as the prestige goods are found. For example, Fig.11 – 20 ~ 31 found in Tokoro Town, Biratori Town and Chitose City are the iron coil-like remains which are probably from of northern peoples origin like as shaman's belt. Fig.11 – 32 ~ 34 found in Biratori and Tokoro Town are the small bronze portions and the origin may be Mohe and Jurchen Culture in Siberia. In these bronze portions, a example of Fig.11 – 34 found in Tokoro Town belongs to Okhotsk Culture.

Fig.12 is the white porcelains of Honshu origin which were excavated at Katsuyama-date site in Kaminokuni Town. The symbolic mark is notched out of the bottom of these plates that resemble closely the mark of itokpa, the mark of ancestor, or the mark of sirosi, the sign of owner, in aynu society. The aynu peoples have been living in the Katsuyama-date may think these porcelains as the prestige goods.

Concerning the trade of archaeological materials, a lot of the prestige goods or the ikor such as treasures excavated at Menashidomari site in Eshashi Town of Okhotsk Culture, Moyoro site in Abashiri City of Okhotsk Culture and Ohkawa site in Yoichi Town of Satsumon Culture, Middle Age and Modern Age. So these three archaeological sites may be main barter ports of trade from Satsumon period to Modern Age.

In this connection, we can find that the prestige goods are placed on *chashi* in the old documents of Edo era, and around the ikor many plunderer exist in aynu legends. For example, the name of topattumi (a thief), ikasitumi (a group robbers) and ikkatumi (a ruffian) appear at the main area of Hidaka, Tokachi, Kushiro and Nemuro district. Thus, it can be said that there is a possibility that a study of the prestige goods or the ikor make clear the process of a formation of the Aynu culture. We should treat these archaeological remains more carefully.
